麻生路郎主宰

柳川雜誌

五月號

大正三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十一年五月一日發行　第十三卷第五號(毎月一回一日發行)

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

健康の創造への第一歩

モリカワ グルコーゼ

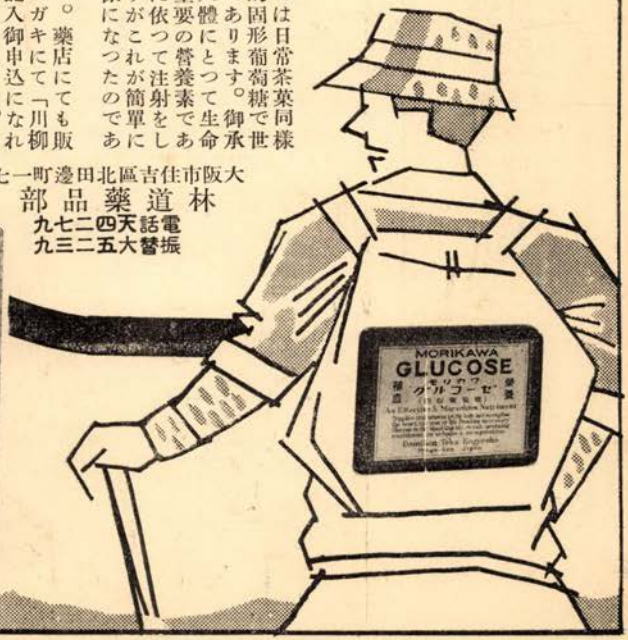
固形葡萄糖

ハイキング、登山
スポーツ等の心身
疲勞恢復、病中病
後、産前産後の營
養補給、小兒、老
人の虚弱者の健康
增進

モリカワグルコーゼは日常茶菓同様に攝取出來る内服的固形葡萄糖で世界的の優秀營養劑であります。御承知の通り葡萄糖は人體にとつて生命の綱とも云ふべき重要の營養素であつて從來醫家の手に依つて注射をして居たのでありますがこれが簡單に口より攝取出來る樣になつたのであります。

是非一度御試下さい。藥店にても販賣して居りますがハガキにて「川柳雜誌」に依る旨御記入御申込になれば早速代引にて御送り申上ます。

藥價
一ポンド入 二、〇〇〇
½ポンド入 一、五〇〇
⅛ポンド入 五〇〇



大阪市住吉區北田邊町一七六
林道藥品部
電話 天四七二九
振替 大五二三九

本社五月句會（休會）

川柳雜誌社

川柳雜誌社關係五月句會案內

主催	日時	場所	兼題選者	會費	雜	幹事
道頓堀支部	三日 夜七時	阪急前集合 播州松めぐり	城ハイキング	實費	雨天順延（十七日）	史呂
兵庫支部	五日 夜七時	兵庫和田宮通り 衛生事務所	鯉幟 團體 明珠選 某人選	十錢		久米雄
今治支部	八日 夜七時	米屋町 伊豫貯蓄銀行	驛辨、受付 素人 宵明選	十錢		宵明
竹原支部	九日 夜七時	竹原町 森川仙水居	青空、易者 若葉	不要	投句歡迎	承春
大鐵支部	十三日 夜五時	大鐵倶樂部	連絡、船、微風 メリケン粉 艸樂選	不要	來會歡迎	某人
天王寺支部	十六日 夜七時	天王寺區伶人町 六四山本葉光居	男裝 雨だれ 豆秋選	十錢		豆秋
大阪朝報社第八回句會	十八日 夜七時	南區疊屋町 カナメ喫茶店	純喫茶 汀柳選	二十錢	兼題及席題の天位に呈賞	與三郎
上町支部	二十日 夜七時	南區疊屋町 カナメ喫茶店	高津宮 蛙 艸樂選 汀柳選	二十錢	茶菓を呈す	都會人
高知支部	二十一日 夜七時	中島町 カフエー ブラジル	襟	十錢		春水
今治支部	二十二日 夜七時	米屋町 伊豫貯蓄銀行	肩揚げ、田前持 高下駄 曉童選	十錢		宵明
竹原支部	二十三日 夜七時	竹原町 森川酒店	振袖、親切 勝負	不要	投句歡迎	承春

支部句會は必ず前月中旬迄に決定して御報告願ひます。

川柳雜誌 第十三卷第五號 五月號目次

文苑

川柳と松浦靜山侯……石崎柳石…(四)
川柳指導講座……塚越正光…(八)
武玉川二篇研究(三五)……梅本秋の屋
森東魚…(一三)
蛭子省二
川柳時評 東京から(五)……高須啞三味…(五二)
「六厘坊十句」の再檢討(二)……木村半文錢…(二二)
佛蘭西俳諧の鑑賞(下)……鈴木小寒郎…(一八)
あや美を悼む(句評)……生田翠夢…(二六)
柳界の動向……椙元紋太…(二五)

色ページ

金色蝙蝠……不朽洞…(三三)
讀まなくてもいゝ頁……X・Y・Z…(三六)

あくびどめ田の字內閣

忘れちやいやよ　川柳名人錄

寶塚と女性ファンの特殊相……寺川　信…(三八)

創作

川柳塔……麻生路郎選…(六)

近作柳樽……麻生路郎選…(四一)

粒々集……久流美・一徹・鞍馬・柳秀…(一二)

日本名所名物川柳(四國の巻)……前田五健並書…(五四)

一路集　渚誕生……住田亂耽選…(五六)
……市場沒食子選…(五六)

各地柳壇……路郎・艸樂・汀柳整理…(五八)

柳界展望……(六八)

編輯の窓……路郎生…(六九)

社關係の人々……(七一)

川柳雜誌案内……(七〇)

表紙畫……富本憲吉……

川柳家の戸籍調……綠雨…(五六)

本社關係句會案内……(一)

表紙題字……路郎主幹……

川柳と松浦靜山侯

石崎柳石

肥前平戸藩主松浦靜山侯（一七六〇—一八四一）は、遺著「甲子夜話」正續二百卷、後篇八十卷がある。當時昌平黌祭酒林述齋と交篤く「述齋は予が通家にして四十年許の交誼なり（29卷）」と誌して居る如くであるが、その退隱の後、述齋の紹漁によつて即夜に稿を起したのが、文政四年十一月甲子の夜、時に六十三歳であつた。故に甲子夜話と名づけられる。爾來廿年間、日夜精勵して、文の成る毎にその取捨を祭酒に求めた。かくて祭酒の是正を經たるものを正編と爲し、其他を續編として殘されてゐる。正續二百卷已に成るの後、更に後編の稿を繼いで筆を執つたが、未だ百卷の數に滿たぬうち、終に天保十二年六月廿九日、歿せられたのである。時に年八十二であつた。

松浦侯、名は清、號は流水、後に靜山と改む。肥前平戸の城主、從五位下に叙し、壹岐守に任ぜらる。靜山の號の由來に就ては卷七、十一及び八十八に詳しく記載されてゐる。

「林子は默山と號し、予は流水と號す。往後の翰墨屢々これを用ゆ。或日つら〳〵思ふに林子の默は戲名ながら寓意あり。そのこと前册に云へり。默は靜なり。說命に恭默思道とゝ、山は恭なり。是をもつて時世の態を觀るべし。又予が流は字書に水行なり。又下るなりと。實にその如し。隱倫日月に隨て逝く（三）常行あつて爲す所なし。たゞ動樂するのみ（29卷）」

「予が豫め設る法號を豐功院靜山流水居士と云、夫れ僧家には上を院號、中を道號、下を法諱と云、この靜山と云は過し文化三年冬十一月十三日退隱のことを其時の閣老松平豆州に願請せしが、四日を經て十八日に肥州と予が名代秋月山州とを召て允を蒙れり、かねて志を決したれば其夕に總髮して名を靜山と更ることを請申せしに、翌十九日允蒙れり、予が退隱此年に起りし上非ず、五六年前より思興りたるなれど、臣等の志を興にして家政を謀れる輩の月時に止めしかば、忍難くして延せしが斯年

に及で意中慨歎のことありて決然と乞假せしを、豆州は予が故妻の兄なれで素より我が志は知りぬ。」88卷

依つて流水から靜山と改號する迄の經緯が偲ばれるし、且つは林述齋との親交の程も察知し得られる。又一面、大御所樣時代の帷幄に列する一人の惱みも觀取しえられる。

○

當時の殿樣の著としては、廣く黃昏の少將事松平樂翁侯の「花月草紙」が讀まれて居るが、これは大分に擬古的な雅文に充ちた隨筆集であるが、靜山侯のは、一面考證學的であり、考古學的でもあるのは、時勢の然らしめた所でもあらうが、その量よりも、殿樣の市井の見聞錄として、側近者の呈供する三面記事的なトピックもあり、時に途上の行列の簾越しにほの見たスケッチ等もあつて、それらに所謂エログロノン調の濃厚である點、當時の時勢粧のグリンプスとしてみても、史學的に多分に評價されてよい著であらう。とまれ殿樣の筆のすさみとしては、量に於ても質にしても宏く深いものが含まれてゐる。

○

靜山侯のこの著執筆の晩年は、內外多事とも稱すべき幕府行政難の時で、外に國境を脅かす黑船來朝の、たつた四艘で夜も寢られぬ頃であり、內に尊王倒幕の潛行運動が擴大して居るの世態であつたが、表面文化史的には所謂化政度の頽廢美を釀成して、絢爛爛熟の陶醉境に、大御所樣時代の江戶文化の華を咲かせて居たのである。十一代家齊將軍は初期に反して後半期は政に倦み、柳亭種彥寫すの「偐紫田舍源氏」の圖繪の如く、噴火山上の狂態を展開して居たのであつた。

これを川柳史的に見れば、家齊將軍の初期、寬政の改革によつて、既刊の柳多留集中、風敎に害ありとの理由を以て、大名冷評、罪刑諸例、賭博、有夫姦、心中、淫賣女、各種女流性行爲、陰陽機質等に關する句を削除する等、柳樽改版の災を蒙うむつたが、洒落本や人情本等の作者の蒙つた程の痛手もなくて反へつて享樂的世相の文運に乘つて、發展して行つた。が、句體はもう後世狂句と稱せられて蔑しまれる程に駄洒落や緣語に、詞の可笑味をねらつて低下して行つた。勿論その間に在つて、四世川柳を繼ぐ人見周助の八丁堀同心たるの役人氣質に影響され、次いで五世川柳（初號腥齋佃り）の柳風式法制定等に依り、合せて天保度の改革と相俟つて、柳句の詩的價値を減損しては行つたのではあるが、その普及、その聲望は又大なるものが有つたのである。

○

靜山侯生後五年目、即ち明和二年七月に柳多留初篇は、前句附選者柄井川柳と、柳樽編輯者吳陵軒可有（號木綿）と、出版書肆下谷竹町花屋久次郎との良きトリオに據つて、この人の和が、江戶ッ兒を背景とする地の利を得て迎へられ、茲に後年百六十七篇を上梓する迄の幸運のスタートを切つたのであつた。實に此の年は又四月十七日に東照宮百五十周回神忌が擧げられた記念すべき年でもあつた。（未完）

川柳塔

路郎選

山本丹路

魂をあづけるものがひたにほし
挨拶のうるさき人が向ふから
いんてりの深窮辭がつきまとひ
宵寢して戀の數々さびしけれ
本ばかり買ふ子やなあと母の愚痴

増位汀柳

環境はともかく女五人ゐる
氣分丈け櫻のぶぶで味はされ
こゝろまで秋のくるのを恐れ居り

橋本綠雨

善光寺　四月三日

念佛をまち〳〵にきく善光寺
法要にすはりなほして灯を眺め

雪の高田附近　四月三日

行商の橇が積いて景になり

中禪寺湖

湖も氷となつてたゞ廣し

淺草

淺草の人出に下駄をとられて居
花を見に來てゐると云ふ酒をつぎ

生田翠夢

朝の風呂宗右衛門町で逢ふたこと

大津の春（二句）

笈摺のあとおいかけて三井の鐘

京の水となる疏水に花片

悼あや美君

一人逝く身の淋しさや春

麻生葭乃

ワンステップのテンポで茶碗洗ふかな

菜種は黄色れんげは赤に咲くものよ

防犯係女將に言質とられたり

朝田新水

仲人の勞に春雨けむるなり

お辭儀したことも老眼鏡で見る

夜を罩めて書くは未來への手紙

高知得月樓

盆梅の香に得月は更けわたり

耳隱し神代の様な女を見

關本雅幽

問題になるもならぬも機關銃

農村救濟問題だけにしておかれ

なんぼあれば親子三人生活される

なまくらな病と見られそうかと思ひ

今は我身の生きとし生きん詩を作る

處女のほこりか氣まゝ娘か

食ひつめてしまへば療ほるかもしれず

働く氣の無い南無阿彌陀佛阿彌陀佛

須崎豆秋

地震かと思ひ兵隊かと思ひ

橋筋は春の匂ひのこうこ卷

暴落を知らせに走るノーハツト

佛壇の大賣出しへ鉦が鳴る

即死した人をうらやむこともあり

櫻見にゆく機關車は二つつけ

子供の手茶碗も箸も拂ひのけ　喜多春秋

出棺に顏を直した女たち

あたしにはこの子があるといふ强味

おぼろ夜の蒲團へ女ぬぐところ

醉うて歸れば子供悲しい顏をする

火鉢の手この手遊んでゐる手にて

いけませんお酒のむ人大嫌ひ

人間として金持の子の哀れ

春の空春の煙突春の晝　西村明珠

悲しくもあり悲しくもなし隣の喪

泣く時に泣けて女は美まれ

ぜいたくにくらし日暮れがまだ遠し

三月二十一日竹楓君滿洲へ立つ

今日からは電話番號消して置き

本當の暮しパケツの音がする　岡田某人

ポン引の二三町隨く春の酒

それ〴〵の立場淋しい嘘も吐き

勇退と名付け無職へ突き出され

如露如電但し家賃は前拂ひ

何時死んだともなく無事な人が死に

唉いたら來いと自分の花の樣に云ひ

ピクニツクいつしか艸にかくれけり　吉田水車

こんなこと位出來まへんかと辻將棋

宇垣又辭職催促されに出る

ひとりゐてものかなしきは晝の月　水谷鮎美

劣情とパイプにあきし人の呼吸

卷尺の百呎にも陽があたり

もの言はぬ顏をみおくる逢ひもどり

雨に濡れつゝこの肚が出來てゆく　石曾根民郎

待ちぼけて木の香ふくめる雫あり

春の雨裸像いよ〳〵憂しといふ

再綠の夜か馬車の灯をひとつみて

人妻の影をし踏まずゆきすごし

風落ちて娼婦の影を拾ひゆく　青木史呂

久濶は肩を叩いてくれただけ

旅客機で着いたは遺産相續者

迷ひ子の親が泣いてる交番所　西いわを

急流へ睡眠劑を投げ捨てる

人妻と意氣投合は趣味の上

嫁き遲れ申分なきいゝ身體

心にもない事を云ふ女學生

離綠ともつかず櫻が咲きにけり　大鶴喜由

春の宵髮を乾かす娘と出遭ひ

ざつくばらんに云へばとやはりエゴイスト

酒量の差客を殘して横になり

保險にもとらぬ體が妾おき

太陽にも似て好きな娘のまぶしけれ　村松夢裡

中性のどうにもならぬ身のもだへ

追いつ追われつ昇給貳圓どこ

善人となり惡人となり御人好し　江戸みつる

まどらかに酒呑む人の顏の幸

嫉妬心火鉢の炭火立てみる

悼あゆ美君

戀人は君の魂をはなすまじ

月原宵明

青春の一群が來てバスを止め
弱點に乘じて酒稅上げる肚
隆鼻術有るにまかせての話
喰べさせてくれる女房は歳が上
みあかしの消えたを添乳見さだめる
養子もう馴れてあぐらで飯を喰ひ

植山九天

老父來阪

碁が弱くなつた老父も淋しく見
醉ふて唄ふさくら音頭に合はす妻

市場沒食子

人絹のやうな男が跳梁し
父は父でスケッチしてる春の丘
佛心に禍ひされた儲け口

長男產る(三月十四日)

貧乏を受けつぐいとし子が生れ

姫田夕鐘

十六の妓の水揚げの羽根ぶとん
剃りたての尼の色氣を見逃がさず
目覺しへ心を預け夢にゐる
夕がすみせつせと働く人おぼろ
鐘ひとつスローに消ゆる春がすみ

中澤濁水

運轉手春の流れを顏に受け
くさされるのを寬大に爪を剪り
ひさ〳〵の文に帽子もつけたまゝ

眞田幸捐

うしろから異人が覗く似顏畫師
兵に告ぐ感極まつて母が泣き
子供だけ澤山ゐます初對面
薄利多賣もう宿替をしてしまひ
字の讀めぬ女は涙もろいなり

秀山改メ　奥野其奥

近來の世相論語を讀み直し
川の中電車で着いた京の街
斷髪の丹前凄いおん姿

丘遊舟

米國は時効を待つによいところ
參考書獨學をする氣でもなし
金で得た地位は金ゆゑ捨てるのさ

宮岡白峰

就職へ見事に散つた齒磨粉
濱職のまんま出世のかしらなり
本當は金よと仲居つぎこぼし

新見世間音

佛壇のいゝのが欲しい年となり
吹いたりな切れる氣でゐる妓の無心
情死をほめて出入をことはられ

後藤青兒

雪國の生れは雪を褒めずに出
組閣論食事半ばに箸を置き

酒井大樓

剛直の評あり減つて行く資産
檢討の辭に隱れてる無爲無策

廣原都會人

旅人へ娼家の畫のみだらなる
くりかへす猫の化粧のおもしろさ

尼綠之助

春宵の悲劇年老ひしヒロインで
母と妻かんらん苗や玉葱や

荒井英賀夫

金言の通りにやつて年をとり

町田承春

怒つたりすねたり春の宵は更け

宮内耕朗

鏡臺にうつる二ア人それでよし

石崎柳石

愛の鞭と思ひかへして見つれども

濱田久米雄

手についた靴墨これも生活か

言譯に子供が出來たとは愉し

粒々集

安川久流美

ふる郷の松の雫や耳の鳴り

すべて皆ぢかの話に嘘は消え

妻の顏人の娘とはなれたり

死んだのはけふ戸をしめきつた日はきのふ

自由畵の富士も夜明けの色は色

色戀をさとすに刻み二三ぷく

長谷川一徹

宿の床ジヤンケンポーで決まるなり

祖先の血よみがえるなり陽を拜む

君などは惡貨の一人流行るべし

僞物もひど過ぎて居て面白し

わかれます惡るう御座した不甲斐なし

富士野鞍馬

東都歌舞伎座四月興行

宗十郎の玉織姫に皺が見え

歌右衛門の爲に役者を並びたて

羽左衛門どちらにしても色男

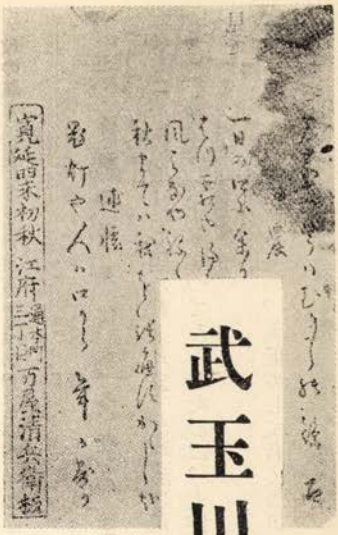
長崎柳秀

洋家具部腰をかけたが買もせず

思ひざししなだれかゝる美しさ

惚られて居ても矢張金が要り

新妻の動けば何か匂いさう



武玉川二篇研究（二五）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(631) **格子から禿の髪へあやめ指**

省二＝端午の廓の一光景。格子から禿の髪へ菖蒲を指してやる。

秋の屋＝菖蒲をさしてやるのは、引手茶屋の女房か、女中などであらう。

東魚＝軒へ菖蒲を葺いたついでに、格子の間から折柄其處に見かけた禿をよびとめて、髪へ指してやると云ふのではないか。格子は妓樓の例の張店の格子だと思ふ。

(632) **碁うちの見出す宵の明星**

省二＝朝からでも打つてゐた、碁敵だらう。

秋の屋＝半日の閑を得た碁客で、明星を見出して家に歸るのであると思はれる。

東魚＝宵の明星はウカとしてゐると見落し勝ちであるが、星に緣の深い碁打だけあつて、天元の一目でも打つたやうな氣分で明星を見出したのであらう。そして、これから今夜の樂しみの碁席へ向ふのであらう。

(633) **かつかれて初會へ上る枝紅葉**

省二＝紅葉見から北國行進と誘はれる。見る事、聞く事、別世界の極樂淨土。遂に病みつきになつてしまふ、古川柳は餘りにも多い。

東魚＝段々其道にたけてくると、紅葉などは賣るやうになる。

秋の屋＝擔がれるのは紅葉の枝ばかりでなく、生息子もである。

(634) **氣の勝て居る品河の猪牙**

省二＝猪牙などの小型舟は隅田川を走り、兩岸眺めて松だとか椎だとか、娯しむでゆくところに一段と遊興がわく。品川の海では廣すぎて、點景にもなりにくい。その海を渡さうといふのだから血氣の勇だ。「品川へ猪牙は血氣の勇でのり」(古句)。

東魚＝兎に角海を猪牙で横切る事だから、それこそ血氣の勇でもなければなし難い。品川へ行く猪牙の船頭なんぞは平氣なものだ、といふ心持を「氣の勝つて居る」と現はしたのであらう。

秋の屋＝船頭よりも乘客の方が、氣が勝つてゐるのだと思ふ。

(635) **伴頭の異見に下る春の空**

省二＝異見されて居る若主人公、さぞかし重苦しい心境であらう。世間は浮立つてゐる春だのに、大伴頭の强異見では。

東魚＝若主人たるもの、天低くして背くまり、といふ心持ちである。

秋の屋＝此の若主人は、二代目らしい。

(636) **淨るりて殺した聲を鉢扣キ**

省二＝「鉦打たゝき、かけ合て諷ふ」で、その聲は淨るりで稽古しあげた惱艶さであるとは、京阪趣味を描出して居る。

東魚＝「殺した」は美聲で人を惱殺したの意であらう。其聲で鉢叩に出てゐるといふので、鉢叩きは通な人が道樂氣でやつたのも、隨分あつた事だらう。

秋の屋＝聲自慢の老婆が、和讃を諷ふのと好一對。

(637) **桑の杖おもへは遠きはかりこと**

省二＝「西瓜の水も遠いたしなみ」(武・初)と同巧。桑の箸で食事をすれば、中風に罹らぬとて用ひられた。桑酒も同樣の効能が宣傳される。見聞集によると、桑の杖は養生によいと、深山をわけて探し、馬背にして江戸の町に賣りに出たさうで、若者さへ求め、炎天道よきに杖つくと、流行を笑つて居る。—「藥いじりのうへる桑の木」(武・三)

東魚＝「轉ばぬ先の杖」を句はしてゐると思ふ。

秋の屋＝前説の如く、俚諺の意を含むでゐる。

(638) **水かゝみ見る舟の退屈**

省二＝船での退屈さに、ふと水鏡をみる、風なき穩かな光景。

東魚＝客達の用談のすまぬうちとか、碁のはてぬうち

とかに手持不沙汰でゐる船によばれた、美妓などが思はれる。

秋の屋＝「泣いた明石の風待に」といふやうな、泊り舟の情景と思はれる。

(639) **燒鹽を削る女房の膝せまき**

省二＝壺に入れて蒸燒きにした鹽(純白となる)を、こそぎ取るので、「膝せまき」は、壺を上せて動かぬ樣にして居る姿である。

東魚＝相當壺の大い事が、「膝せまき」に想像される。

秋の屋＝燒鹽の壺は、餘り大きいものでなく、小形の湯飲茶碗ほどのもので、それを小刀で削ると、鹽が四邊に散亂するから、「膝狹き」といつたものである。

省二＝幼少の折、祖母が行つたのを、たつた一度見た事は、一般には通用しないかも知れぬが、一寸した素燒の壺に鹽をつめ、繩で丁寧に捲き赤土で塗りてから燒く。黑燒法に等しいわけで、素燒でないと、火のため破損する恐れがあるからだ。諸辭典によると、悉くが素燒と說明して居る——出來上つたのは削り取る、此外家人が旅行歸りに赤穗名物を求め來たつたものは、四角になつてゐた。知已に尋ねしたら、「赤穗土產物として、四角形の白雪模樣にして紙匣に入れて賣つてゐます」と。

秋の屋＝鹽壺は江戶時代より明治中葉まで、東京の荒物屋に販賣せる物は、高凡三寸、上部直經凡一寸八分、下部直經凡一寸四分。上廣く下狹く、蓋は只上に載せたるのみにて、赤色の土燒(豆を炒る焙烙と同質にて素燒にあらず)同質の扁平の蓋あり、中に入れたる鹽は固形にて壺と同じ形なり。これを使用する時は小刀にて削るか、山葵卸にて卸すなり。前說の如き鹽壺は東京にてみたる事なし。明治末頃より土燒の壺は全く無くなり、硝子の壺入となる。赤穗の燒鹽には角形圓形花形等一見樂雁の如きものを貫ひたるものあれど、今日にては硝子壺入にて多く賣出す。亦紙袋入にしてある。前述の土壺入の燒鹽は一個一錢か二錢にて賣買されたりと記憶す。

省二＝赤穗の花形鹽は梅、藤其他色々出來て居る。レツテルによると、「赤穗名產、淸潔秘方、花形。御燒、鹽潮曜堂」などとある。近代世事談に「天文年中、洛上鴨畠枝村藤太郎と云ふもの、泉州湊村に住居し、紀州雜賀鹽を土壺に入れて燒きかへし諸州へ出す。壺鹽屋藤太郎と號す」天下一の號をさへ賜はつたとある。本朝食鑑「一種有燒鹽者、用白鹽、再入瓦器、掩口、炭火燒過、則色白如雪形輕味淡、性亦柔」と。

(640) **地紙賣我物好も言ふて見**

省二＝陰間のなれの果。なまめいた風姿で、地紙箱を擔いで歩く。「地紙賣一ト聲よんで髯をなで」。時には自分

でも物好だと思ふ事もあらう。從て世間咄のうちに告白も出る。

東　魚＝私は嘗て、「或る時は年に氣のさすチンドン屋」といふ句を作つた事があるが、この句の地紙賣もさうした氣分であらう。

秋の屋＝私は斯う言ふ地紙が好きです、といふまでゞ、自己の年が闌けたのを、氣にかけるのではあるまい。

(641)　**蚊屋越にゆり起されて早合點**

省　二＝よくある事だ。此句ワイ吟に解されて居るが、私は特に次ぎの如くとつてみたい。一寸寢ぼけ氣味で返事をする。早合點をして。

東　魚＝バレと云ふではないが、受入れる受入れぬに係らず、誰か自分の處へ云ひよりにきたなと、早合點するのであらう。女の自惚れ氣のあるところが思はれる。でないと早合點の味が乏しい。

秋の屋＝戀の句に相違ない。早合點をするのは、粗忽の下女歟。

(642)　**他人の目からしれる一生**

省　二＝他人の觀察が正しくして、彼の成り立ちが判知出來たといふのか。――無論將來の事にもかけ。

東　魚＝あの人は相當苦勞をしてきた人だなどゝ、他人の觀察に一生の經路が、押しはかられる。

秋の屋＝眼識に據つて、人の一生の榮枯盛衰を豫め推斷するので、それが自己の親戚などであると、贔負で推斷を誤るけれども、他人であると、それが適中するのである。

(643)　**逗留の二晩めから能寢人**

省　二＝場所が變ると寢つきにくいものだ。二晩目からは馴れもし、前日の寢不足も加はつて、熟睡。

東　魚＝事實あることで、穿ち味を前句に響かしての句構であらう。單獨では餘り當り前すぎるやうでもある。

秋の屋＝無技巧であるけれども、惡い句ではないと思ふ。

(644)　**抱つくまてか戀の道行**

省　二＝目がものを言ふとか、附け文とかは第一段。握手「手を握られて顏は見ぬもの」(武・初)。抱擁と進行するのが戀愛の道程。

東　魚＝云ひ廻しが面白い。

秋の屋＝遠くて近きは男女の道といへど、それには橋渡しもあり、越えかねる人目の關といふのもある。

(645)　**大工の智惠を寢ころんて見**

省　二＝普請好き。流石に大工は大工だ。と流々の細工を眺めて滿悅。「寢轉んで」に興趣十分。

東　魚＝「窓明けた大工をほめる丸裸」(武・初)と同じ心持ちであらう。

秋の屋＝樂隱居が茶室の新築らしい。

(646)　猪牙のふとんを撫る椎の實

省　二＝大川通り松浦邸を詠むで、「椎の木は殿樣よりも名が高し」と。吉原行の目印の一つ。「さぞ椎の實がならうとは野暮な猪牙」。椎の實に撫でられるのも、結局は甘い方だらう。呵々。

東　魚＝椎の實が撫るといふのではない。椎の實なら叩くとあるべきだと思ふ。偶々布團の上に落ちて來て、轉げた椎の實を手をさしのべて探り拾ふさまを、撫ると表現したのであらう。

秋の屋＝松浦邸の椎の木は、大川の水上まで枝は伸びてゐなかつた故、猪牙舟にその實の落る筈がない。これは作者が机上で考案した句である。

(647)　眞顏に成て武士の付ちし

省　二＝「付さしを渡すと直にあちら向」(武・初)の外、付さしの句は前出した。酒、煙草、お茶なんでもよろし、四角張つて付差をするところ、武左衞門の眞面目。

東　魚＝女から貰らふと、頂いて呑む連中である。

秋の屋＝舊劇の石井常右衞門の類であらう。

(648)　さくらを浴る馬の横面

省　二＝立面では風流氣乏し。横面で可。

東　魚＝咲いた櫻になぜ駒つなぐ、を考へなくともよい。勿來關などを想像される。「浴る」が句の命である。

秋の屋＝蕪村の「木下が蹄の風やちる櫻」の句と、同巧異曲とも言へる。

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・前入・清書三十二錢

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

定價壹圓　特價八錢　送費六錢

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳句集

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。(四六版二〇〇頁)

木句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。

殘本僅少至急申込みあれ！

頒價壹圓　送費六錢

發行所

大阪市西成區玉出本通三丁目六地　不朽洞　振替大阪三〇三　電話天下茶屋二九三二九七五

佛蘭西俳諧の鑑賞（下）

鈴木小寒郎

——（三）——

青葉の上に
いかめしく、そゝりたつ
クリーニーの天主閣。

風光描寫としては稚々たるもので、果して詩としての規準に入るかどうかは疑はしいが「いかめしく」といふ、判斷に何かを穿つて見るつもりであらうか、とに角先づ俳諧誌としては初歩の作である。

暗闇につゝまれる
蝋がなきだす
衞菊樹下の夕飯。

私達が、フランス文學の中で、しば〳〵接する、いかにもフランス的な夕飯の光景が、浮んでくる作であり、どことなく、日本俳諧的な感性の移入が香つてゐて、それでゐて、私達にエキゾチックな感情を忘れさせないところは、フランス俳諧である。

片手で洗濯物を叩きながら
ほかの手で
額の上の髪をなであげる。

これには、はつきりと川柳的感情が躍つてゐるではないか。

髪の美しさをもてあましてゐる。

などを思はせる、素材であり、各國に共通する、女性の美しい微細な心づかひがよく表現されてゐる。「洗濯物を叩きながら」といふ事が異國的であるが、「ゆすぎながら」とすれば直接日本的なスケッチになる。

以上は「水の流れに」からである。

ジュール、スガンの「戰影百首」は、戰場のリアリズムを詠つてゐて、仲々興味ある彈力を見せてくれる。彼は、ヴオーカンスといふ俳號を用ひて、凝り性な反面をうかゞはせてゐるのも、微笑させる。

塹壕、夜
敵の大軍を前にして
ふたりの兵士。

「ふたりの兵士」何を語るか、輕いペーリスを織り込んだ、戰場の一點景として、よく生かしてある。西も東も塹壕の夜はかゝる悲壯美を包含して受けてゆくのである。

彼は女學生からきた手紙を讀んだ
それから差出人の名を見つめた
自分の所へ來た手紙ではないと言つた

かゝる心理描寫は、フランス文學のホームグランドである。我々が詩としてこの作品を評價するには、やゝ散文的ではあるが、說明

的な中に、しつとりとした、淡いペーリスの餘韻を感ずる事はできるのである。

大使夫人は立去つた
夫人は激勵して御世辭を振まいたさうだ、僕等は誰にも逢はないまだ飯も食はないのだ。

戰場の只中にある、作者自身を思はせるのは何よりも強い、俳諧の「寂び」が、何となくプロ意識といふか、戰さの捨鉢な心理といふか、そういふ灰色なものに置かへられてゐるのを感じられて、面白いではないか。

ヴォーカンスは他に二三の俳諧詩集をものしてゐる。

蒲團の上の白い肉體は
綺麗な白い泌點だつた
あゝ、ほんとになつかしい。
（モーブラン）

×

彼女は私の手に手を重ねた
私はゾッと身をふるはした
彼女は二度としなかつた。
（モーブラン）

前者は俳諧といふ名にふさわしからぬ、いはゞ近代的新感覺派の俳句といふ表現でありそれ自體可成鮮明に感覺詩を指示してゐる。後者はモーパッサンの心理描寫を思はせるものがある。形式の量から言つてかゝる纏綿たる描寫ができたので、先づ日本俳人にはこの味はそつくり表現できない。

我國にもずゐ分紹介されてゐる、ヴエルレーヌ一派の象徴主義を、强迫するに詠んだ、ヴォーカンスの俳諧詩は振つてゐる。

日本の詩人は
短刀を拔いた
今度こそは冗辯は死んだのだ。

象徴主義は御承知の如く冗辯活用主義である。

彼は又
呼起せよ、暗示せよ、三行のうちに
その冷然たる顏つきを
されどそのしたの苦しみを、餘すなく

とよく俳諧道の眞理を喝破してゐるのは、素晴しい。「暗示せよ」といふ精神は根本的に歐米の詩と趣を異にするものであり、彼らフランス俳人達の作品を通じて、いかにこの暗示せよに腐心してゐるかは思はれるのである佛蘭西詩は在來四行に書かれたものが多いのであるが、三行詩を彩用した事は詩人の感覺としては先づ妥當であつたらう。

爆彈の落ちた穴が
その水たまりに
大空を映してゐる。
（モーリス、レッス）

かゝる情景は、日本詩人、殊に私達川柳家の詩的神經をとらへるものである。

戰場だけに、この印象はなほさらびつたりとくるのである。

ピアノの上に
四つの手
たつた一つの心。（モーブラン）

これはよく詠んである。「たつた一つの心」といふ表現が全體系をよくしめてゐて佳作であると思ふ、形式も短いので、殊にこの句の好さが强められてゐる。

寢臺の足もと、鏡付の箪笥
斷頭臺に昇る心地
我々二人の罪深い顏が映つてゐる。
（ヤゴブ）

言ひすぎてゐる嫌ひがあり、小說的な轉景を道具立すぎてはゐるが、ゾラの「罪の渦」の性慾描寫を思はせる。フランス文學の頂上であるが、俳諧としては失敗した表現である。

夜にまぎれて女中が
子供を井戸の中に捨てにいつた
すると月がでた。
（ルネ、ドリアール）

通俗小說である、そして通俗小說のある意味での良さがでてゐる。「すると月がでた」といいふ感じが、歌舞伎の「袈裟と盛遠」を思はせてゐる。

さすらひては
何かせん
この花、この蟲、この雲も。
（ジュノワ）

懺悔錄中のルッソーといふ味である。「寂び」「しをり」の當込みであらう。「花、蟲、雲」といふ系連は、いかにもフランス人的である。

こゝもかしこも
紙だらけ
おや、うちの人が歸つてた。
（ブルトン）

ひよんな穿ちが見えるではないか。

我が病室
妻見は我を見るかな
運命の冷たき眼もと。
（ジャゴブ）

啄木の一斷片である。

我がちさき家
北風ぞふきまさる
何かせん
（ジャゴブ）

かぶれすぎたのであらう。

あの戀文が
二つに疊まれて
宮のありかを探してる。
（ルナール）

これは私達におなじみの「にんじん」のルナールである。これはいかにもフランス自由詩といふ味であり、俳諧の形式だけを用ひたものであらうと思はれる。

シャボン玉の中へは
庭は這入れません
まはりをくる〳〵廻つてゐます。

これも私達には、その作品に接する事の機會が多い、なんでもござれで有名な、詩人ジャン、コクトオの作である。

彼の東洋趣味は有名である。

この「シャボン玉」は、やはりルナールと同樣に、形式のみを主として採用してゐるものであり、內容はいかにもフランス詩そのものである。これは堀口大學氏の譯である。

堆積された白い岩
この雲の登山者
氣球
（ジャゴブ）

マックス、ジャゴブは非常に作品が多い。これは北川冬彥氏の譯であつて、ジャゴブは立體派の感覺で、自然を解體して見せた詩人として近代有名である。

この作は前のジャゴブの作にくらべて、形式的な方面にのみ俳諧的である。

——（四）——

フランス俳諧詩は、日本俳諧の、五、七、五、三段階の詩的經濟の適應性を、自國語の三行詩となし、冗辯を捨てゝ、簡潔な表現を採用して、形態上の、空間にある潤ひを、その裏にひろがる世界とをねらつたもので、俳諧眞道の一面にはふれてゐる。

しかし、これもやはり、彼らにとつては、一つの美しい趣味の道具にとどまり、人生觀上の評價を與へる事をしなかつたらしく思はれるのはやはり、國民性といふ永劫の溝が、自ら大きく決定してゐるものである。

フランス俳諧は、一九二三—一九二七の四ケ年がその全盛期であり、その後は漸次下火になつてゐるのを見てもやはり、歐米人の日本憧憬の際物としての一面を語つてゐる。以上作品を通じて、俳諧の中、川柳的方面をとつて人情描寫の多い事は、やはり彼らが、日本俳諧の自然諷詠と擬比して、自國の風光がいわゆる「寂び」「しをり」「細み」なぞの適用

としては滿足に價しなかつたものであらう。

人情諷詠においては、フランス文學者獨特の心理描寫は手に入つたもので、フランス的日本俳諧といふよりも、むしろ、日本俳諧的フランス三行詩となつてゐるのは爭れない。

散文的に流れるのはやはり、國語の問題であり、私達は先づあれ以上を望む事はできぬであらう。形式の單化にはいかにも手を燒いた事であらう。

唯三行の行間にたゞよふ、日本俳諧の切字的な潤ひをキャッチしてゐるのは大手柄である。むしろ俳諧と意味を別にして、私達の掬すべき何ものかゞある樣に思へる。

つまり日本俳諧を規準にとれば、いさゝかの難點はあるが、三行佛詩として私達に大きな興味をなげかけてゐる。

プラトーが「等しいものは等しいものにのみ知られる」と敎ふる通り、やはり「知られざるもの」は永遠にのこされてゆくのであらう。

我國にも、三行詩といふものがある。

これはその多くは未知であるが、やはり俳句的な方向をとつてゐるもので、層雲派の俳人のよくするところである。

耳

私の耳は貝のから
海の響をなつかしむ。

（堀口大學氏譯）

ジャン、コクトオの二行詩である。

これなぞはたしかにいゝ味を見せてゐるもので、私にはより俳句的である樣に思へるのである。

これを荻原井泉水の二行詩と比較して見ると仲々興味がある。私の考へであるが、二行詩は逆輸入ではなからうかと思つてゐるが。

自然はすつかり眠つた
水車の心音だけがきこえる

×

「おーい」と淋しい人
「おーい」と淋しい山

これらの井泉氏の二行詩を見ると、二行といふ形式の先在觀念を三行に置かへて見ればあるひはフランス三行俳諧詩と同じ體系になるのではなからうか。

私は、俳句の英譯が話題となつてゐる今日かゝる方面に先づ進路をとつて、二行詩なぞの英譯の方が、辨證的でより効果的である樣に思へる、俳句の韻律を無視して、（英譯に絶對不可能なる爲、それは日本詩の非國際性によるのであるが）言葉の殘屍を譯するよりも丁度同程度のものから入つて、英詩化した方がよいと考へてゐる。

かく三行詩としての評價を獲得してゐる、フランス俳諧詩にてらして見て、俳句的三行又は二行英詩化として、英語的音感を把握する方がよいと思はれる。

俳句の眞道を歐米人が極める日は、日本語の國際性が確立した日である。

とに角、フランス俳諧詩は主として、立體派詩人の手に成つてゐる處を見ると、ある程度までの消化は認められるのである。

私はこれら譯詩を日本的に受用したのであるから、そのフランス的價値とは自らそこにギャップのある事は當然である。

敢へて俳諧といふ語を採用したのは、俳句と言ふよりも適應する樣に思へたからである

クーシューには、一九〇六年頃に川柳の佛譯があるのだが、殘念ながら原句も譯句も知ることが出來ぬ。川柳が外國人の手によつて外語譯されたのは、クーシューが最初ではあるまいか。（完）

（二月十六日）

故小島六厘坊

「六厘坊十句」の再検討（二）

木村半文銭

落人のあとを芒の露が散り

日本坊　いの一番におツ付けるなんテ不氣味だね、六厘も仁が悪イよ、所謂川柳的手腕かね。さて巻頭のこの句いゝね、氣に入つた、ズント買はう、跡を芒の露が散り、あとがうれしい、落人の裾にかゝる露では面白くない。この句は本來ウソの句だが可いよ、こしらへるなら恁ういふ風に拵らへなければ駄目さ、我輩は實地とやらにコビリついた句より嘘とまことの間が好きだ、ウント意に適つた。この句を輕佻だなんて言ふものがあれば跡はワツチが引受けやした、コゝかまはずとおいでなせエと花川戸を極めて見るやつさ、或は大向ふから嬉しがりと申ますと半疊が這入るかも知れぬテ、呵々。

花紅坊　ハテナ、そんなに良いのか知らまだ脳の治らぬセイか僕にはトンと解せぬ。コ、暫らくダンマリでお次に控へた方々の御評定を承はらう。

松窓　古句の感あり聲調もよろし、頂戴一點頂戴。我が西柳樽寺に、これに似て非なる句を作る人ありと雖も六厘に及ばざる事遠し。

七厘坊（日車）　日本坊だけに引き受けさゝない、僕も引きうけるよ、全くいゝ「落人のあとを芒の露がちり」千兩〳〵〳〵。松窓は何故古句の感ありと云ふ、古句の感なし、新らしい事この上なし、ピチ〳〵してるよ、其趣味がさ昔あつたと一緒で句は新らしいちら〳〵しているよ、日本坊が千兩はり込めやをいらは千兩と一兩はり越まうよ、兎に角六厘坊の本領の一部をさらけ出してゐる。

六厘坊　この句、作者はこれを試驗的に作つたもので方々から大した攻撃もあろうとびく〳〵ものでは掲載したのであるが案外の評判で作者目ばかりぱち〳〵させて居る、佳句か、駄句か、僕之を知らず、次に控へたかた〳〵の御名説を承はらう。唯窓君が古句の感ありと云はれたのは不服じゃ、何となればボク極めて新らしい句のつもりで居るからなればなり。

角戀坊　西方諸先生の好評一々御尤の至り、されど强て難を申すと「あとを」とせられしが甚だ嬉しからぬ様に感ぜられ候、落人に芒の露がちりかゝると云ふ「心中」を聯想させる様な所でもなく、只だ露と答へよ合點かと云ふ式では何んだが物足らぬ氣の致され候、併し悪るいとは申さず、角戀坊一流の短

詩として頂戴致し申候

飴ン坊　結構々々、僕の主張する明和振りとは此の句のやうなのを申しやすて。角君はあとを批難されやしたが此のあとが命でげす。

劔花坊　落人と露と芒の配合、奇麗は奇麗に相違ない、所謂詩的趣味も十分ある、しかしながら此配合はズツトむかしの人の配して置いた配合で、この作句者の創作した配合ではない、並の人の句なら結構々々と頂戴をするが、苟も大阪（半註。この下約一寸許り剪り取つて無い。上部に六厘坊の筆らしく「絶調だ」の三字欠、とあれども恐らく例の惡戯で此の文意の適語でない。若し私の現像を許さるならば「柳樽寺」の三字か、或は「の權威」の三字であらうと思ふ。）六厘坊の天才を以てして此句を（半註。「佳い」の二字を消してある。其の横に糸篇と言篇とが微かに見えるところから推すと前記の「絶調だ」の三字は此の個所へ挿入さるべき文字と考へる）といはれるやうでは心細い、奮發が肝要である、もつとも調子は申分がない、修辭に於ても亦然りだ。

なぐさ　奇麗でげす、結構でげす、無論頂の字。

ふくべ　頂と云ふ字はさりもやらず候非常に面白く新調と見受け申して御座る、すこぶる新調と云ふ方ではないが先新らしき感あり。

六厘坊　これが川柳と云へるかどうかは僕の少なからずまどつて居る所である。

半文錢附記　「此配合はズツトむかしの人の配して置いた配合で、この作句者の創作した配合ではない」と喝破するところ遠に劍氏である。例の淨曲新口村の一節にも「落人の爲かや今は冬がれて、すゞき尾花はなけれども……」と名文句があり、情趣的には此の句と同じ趣向を生かしてゐる。角戀坊氏も「心中を聯想される樣な所でもなく只だ露と答へよ合點かと云ふ式では何んだか物足らぬ」と述べ、一應劍氏とは別の意味での苦言を呈してゐる。尤も、この「落人」が謂ふところの男女の情趣的な場面を聯想するもので、戰の敗れて落ちて行く人を指したのでないならば、兩氏の說には一應の理は存する。彼の一茶の句「人間は露と答へよ合點か」の前書には「男女私にちぎりて夜ひそかに逐行を敎訓して」とあるを見れば、此の句と共通的な味が含まれてゐる。事實、敗軍の落武者よりは情事關係の落人の方が適切であらう。さうすると此の句は劍氏の指摘したやうに配合としては古いといふ難は免れぬ。落人、芒、露――の三要素が適量であるだけ、それだけに此の趣向は新鮮とは言ひ難い。然し、角氏の「心中を聯想される樣な所でもなく」の批難は妥當ではない。勿論、この句は心中を如實に描いてゐるものではないが、この句の背景にはそれを豫想し、暗示するだけの情味は溢れてゐる。淋しい情感が流れてゐる。謂はゞ「あとを芒の露が散り」は日本坊說の如く「拵らへ句」であるに相違ないが、この想像的直感は「露と答へよ合點か」と共に、微かながらも「無常迅速、生死大事」の佛敎思想を背景としてゐることは否まれない。即ち、中七、下五はそれ自身が落人の眼に映ずる實景であと共に、主人公自體を內容的に客觀化したものに外ならぬ。そこに無常觀は暗示されてゐると私は考へる。「あとを」の三字が寧ろ此の句の生命であることは飴ン坊說に同感である。松窓が「古句の感あり」と言つたのは、この句の持味たる趣向、匂ひ、リズム等を一と括げにして直角的にさう斷じたものであら

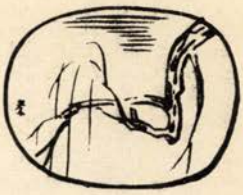
うが、敢て、惡意的解釋ではないらしい。その點、七厘坊は「古句の感なし新らしい事この上なし」と褒めちぎつてゐるのは最眞の引き倒しである。この句は決して趣向に於ても、思想に於ても、新しいものではない。尤も七厘坊自身も「其趣味がさ昔あつたと一緒で句は新らしい」と可なり苦しい辯解をつづけてゐるが、要は、六厘坊の手腕で相當に作りこなされてゐるが趣向の陳いことは言ひ說く便もない。六厘坊自身も不服らしく「古句の感ありと云はれたのは不服じや、何となればボク極めて新らしい句のつもりで居るからなればなり」と自說を述べてゐるが、なる程、古川柳にはこの趣向の如き非趣味的手法は柳樽などに類例はないやうであるが、古川柳以外には此の句はし方、素材の扱ひ方は可なり用ひられてゐる。大體、「露」でその人の運命を匂はせるなどは俳家、歌人などの常套的手法に屬するもので、その一事だけでも決して新しい句とは言ひ得ないのである。勿論、この場合の「露が散り」は實景を想像的に叙したのであらうが、その目標は「落人」の身の上を暗示するに役立てゝあることは申す迄もない。だから「露」を「落人」の運命に擬してゐるのである。即ち、匂はしてゐるのである。この趣向を陳いと私は言ふのである。例へば露で人間の運命を匂はしたものでは

よく見れば露もしばらくひとさかり　成美
露の身といふもまことやまくらもと
酒くさき人の寢がほや松の露　曉台
逢ふはうれし夢絕てのち露を呵す

の如く例句は可なり多い。

夕露をはらへばそでに玉消えてみちわけかぬる小野の萩はら西行
折らでゆくそでにも露ぞこぼれける
萩の葉しげき野邊の細道

斯うした類想は際限がない。勿論、この句とは直接的に相觸れるものではないが、然し佛教思想の影響をうけて、無常を詠嘆する上に於て、落人、芒、露の如き配合は、如何に好意的に見ても新しい傾向ではないのである。尤も六厘坊自身は新らしい川柳と自認してゐるが「これが川柳と云へるかどうかは僕の少なからずまどつて居る所」と告白して疑義を抱いてゐる。この疑義は川柳の本質的なものへ對してゐるのは勿論であつて、この句の持味――いづれかと言へば川柳的と言ふよりは非趣味的情感――に就て一應の考慮を拂つてゐるのである。それは新しいとか、古句らしいとかの問題ではなく、もつて本質的な惱みである。その當時としては此の疑義は蓋し當を得たもので、それだけ、川柳は未だ非詩的領域を幾歩も出てゐなかつたのである。角氏は「短詩として頂戴」し、飴氏は「僕の主張する所謂明和振り」として推賞してゐる意向も、煎じ詰めると兩氏の我田引水的な結果に陷るが、然し、そこに非詩的な川柳の境域より、この句の如きスタイルを見つけたよろこびに、斯くは自說を主張したものに他ならぬ。それだけに、當時としては俗惡低調な川柳壇として、この句は一歩進出――詩情といふ點に於て――してゐたものと見るべきである。それは新しい、陳いの問題ではなく、要は、川柳が詩的（藝術的）に進み得らるゝか、得られないかの疑義に答えたものとして立派に價値が認められていゝと私は信ずる。六厘坊の「この句、作者はこれを試驗的に作つたもの」の一語は其の全てを雄辯に物語つてゐる。彼は、非詩的な川柳に懶らずして、斯く、自己の信ずる道に向つて試練の一句を投じたまでゞある。その意味で劍氏の「此句を絕調だといはれるやうでは心細い、奮發が



柳界の動向

椙元紋太

一

大正十三年一月、川柳雜誌社起つに及んで柳界の空氣は一變した。即ち月刊柳誌の年十二回發行が正確に實行されて他の柳誌が續々これを看做ひ今ではこれが一般の常識とまでなつた。この事は餘りにも莫迦氣たことではあるが、それさへ特に記さなければならぬほど從來の柳界は放漫であつたのだ。川柳雜誌社は總ての施設をぐんぐんと實行した。その頃全然趣味的範圍を出なかつた柳界は、隨つて豆本式柳誌の全盛時代であつた。近頃のこれは又驚くべき菊版氾濫を見ては今昔の感がある。現在の「きやり」「番傘」「京」その他の前身はどうであつたか。川柳雜誌社の與えた刺戟によることは否まれない。これなども柳界の氣運が漸次軌道に乘つて來たことを物語つてゐる。各社の經營に於ける態度も漫然たるお道樂氣分を離れて眞摯な方向に進みつゝある。

斯く柳界の外觀が調整されて來たことは、單なる野心的な手腕のみでなされるものではなく、實に內なるものゝ川柳認識度の昂揚が爆發して表出したものであつて、これあればこそ外觀形式の飛躍が行はれ得るのである。

肝要である」と言はれたのは正に金的であり、六厘坊に一番痛切に應へたであらうと感ずる。

前記の批評中、日本坊の「コ、かまはずとおいでなせエ」だの、七厘坊の「千兩〳〵〳〵」だの、飴ン坊の「此の句のやうなのを申しやすて」の如き江戸辯の多くを用ゐてゐるのは當時の一種の流行文で、彼の、德川期に於ける役者評判記や各種の細見評判などに現はれた文態を模倣したもので、文藝倶樂部誌上にも多く此の種の文脈が存する。當時は例の自然主義初期運動の曙光が漸く萠芽を顯はし初めた時で、一般の文學は未だ硯友社一派の、戯作者風と、寫實主義との重壓にひしやがれてゐた時代だから、得てして此の江戸文藝の脈をひき易いのは爭はれぬ。一葉女史だの、正直丑太夫だのが騷がれてゐれ時分であることを老慮せねば、何だか、時代色がハツキリとせぬ憾みがある。決して、洒落れ本位にのみ、前記の如く江戸辯を混ぜたのではなく要は、その當時での一つの流行的文脈であつたのである。況して、批評の如きは往時の役者評判記とたいした徑庭はなく、時に

併し乍ら何事にも一分の短所はある。即ち社會進出の一手段であることを看取し得ない人々に依て徒らに、柳誌のあるところ主幹あり、主幹のあるところ流派閥あり、閥と閥とは相容れないかの觀を呈して從來の平民的な感じを捨て去つて階級的差別觀に據る風潮が柳界に瀰漫し始めたのである。これは一般社會に行はれる風潮がそのまゝ同じ經營法を執つた柳界に浸潤したものであつて回避し難い歸結である。

二

現代の川柳は常に動いてゐる。水面に落した油のやうに常に擴がらうとする。展びやうとする。雲形になつたり、隨圓形になつたり中々面白い。そして現在では日本地圖を見るやうに長い々々形ちになつてゐると私は感じられてならない。この北端と南端とでは恰るで別箇のものを見るやうに異つてゐるが、中央がこれを接續してゐるから別のものではないのである。然し、油滴が次第に擴がれば擴がるほど稀薄になることは當然であつて從つて油としての存在が疑はれてくる。この時に三つの行動が考へられる。

油と水とは等しく液體である。だから水に混入して油の姿はなくなつても、消滅するのではないから少しも差支へないではないかとして擴がるまゝに擴がらせておくこと。

次は、油としての特性を失ふことは何としても不可であるから、擴がらうとする水面の油を一生懸命元の如くに掻き集めることに努力する。

もう一つは、油が水面に擴がることは、油そのものゝ特性であるから、擴がるまゝに打捨てゝおく。さり乍ら油としての存在を保つために、絶えずあとから油滴を落すことをやめない。

この三つの内どれかを自分達は行つてゐる筈である。數に於ては、擴がる油を元の如くに集めやうと努力して、集らないのを慨嘆する行動が最も多いのではないか。油が切れてゐるのか、あとから流し込むことをしない。集めやうとする行動が却て油を滅茶々々に掻き紊してゐる。第一の行動は川柳の領域を展げてゆくことに役立つてゐる。第二の行動は第一と第三の行動に無意識のうちに役立つてゐる。第三の行動は川柳の存在を世間へ示すは頭取だの、しやれ者だの、半可通を引き出して、評番記そつくりの批評を用ひたのも可なり見受ける。それが文藝批評の上での試みであつたなら、當時の大衆的迎合手段の一つの表現である事を知らねばならぬ。是は、歌壇等にも鐵幹一派が屢々用ゐてゐる。劇壇、小説界は勿論である。だから、洒落文ではあるが、心からの洒落ではなく、洒落文に擬した眞面目な心構えであることを留意する必要があらうと考へる。その點、誤解のないやうに寸言しておく。

因に、各人の署名は批評の末尾に附してあるのだが、見易いために、わざと文章の上部に揭げておいた。他意あるのではない。(未完)

あや美を悼む

生田翠夢

本社元同人北川あや美君(本名村橋彌之輔)が亡くなつた。しかも三月十八日の彼岸入りで、僕等は全然知らなかつた。通知を受け取つたのは其月の二十九日、風の便

ことに役立つてゐる。この三つの行動が共に果しなく續けられることに依て現代の川柳界は長い々々形を構成したのであると考へる。

三

斯うした情勢から生まれる川柳は從つて異つたものゝ勝手な行動のやうに見えるものである。然し冷靜に觀察すると皆切り離せない關係を持つてゐる。寧ろこの趨向は川柳の特性が然らしむるものと考へるべきであつて必らずしも嘆くには當らない、慨くひまに自己の信ずる道を邁進することが最も賢明なる方法だと思ふ。川柳雜誌社がこの賢明なる道を撰んで昭和柳壇に一劃期を作つたことは何としても川柳に對する著しい功績であつた。

元より川柳そのものに斯る內在力が存してゐるからだとは云へ、それを活かせた力は認めなければならない。そこで今後の柳界が如何動くかは、東京柳界や他地方の狀態を仔細に觀察する必要があるが私にはその力が無いから、まづ當面の私の頭に浮んだことだけを記してみると、如上の川柳雜誌社が成した功績の裏に從來の平民的な川柳觀を破壞して一般社會と同じやうな階級的思想を漲らせたといふことがこのまゝ打捨てられてゆくかどうかと云ふことである。現柳界にはこれを是認してこの風潮に乘つてゆく氣持と、これに反感を以て對して居る氣持とが、かなり强大な力を持て晴々裡に對峙してゐることは見逃せない。私は何時これが表面化されるかは知らないが蘆ては淸算される時が來ることを信じて疑はない。

作品の上に於てもさうである。今では極端と極端とではかなりの距離がある。その中に在て平民的な川柳觀の所有者達の、詩人ぶる心を排し、學者ぶることを好まず、事大思想に反撥する精神が、見えざる爆彈となつて底に燻つてゐることを見落してはならない。由來、川柳の有する思想の中に於て最も重大な部分を受持つてゐるものに、この平民的であることを愛する心がある。これあるがための川柳である場合すら存するのであるから、これを蹂躙することは川柳としての濃度を弱めるものである。

兎に角、柳界は將來益々多事、幾度か陣痛の惱みを味はなければならないだらう。

（了）

りでかなり健康になつたと聞いてゐたので、寢耳に水の感がした。

かなり女性的な持主で、神經質な氣の弱いところのある反面に非常に强情でもあつた。

御旅吟社に入つてからは隨分と本社支部間のことに力をつくし、重寶な人であつた同人をやめる前後には、かなり好い句を殘してゐた。

君の戀愛問題についても僕等吟社の連中は君のつきつめた氣持をよく知つてゐて、どうか成立をと願つてゐたが、何分病氣の關係上それを阻止した。僕も隨分君と議論もし、話もし且罵りさへもしたが、結局は駄目で君の意志の强さを見せられて仕舞ふ結果となつて、擧句逃避行と進み、その後仕末に走らされて仕舞ふ破目になつた。

そして君のいかに强い性格かと云ふ事をはつきりと認識さゝれた。

昨年の秋弟みつるに電話があつて、道頓堀で逢つたとの事、この春には手際を見て君を訪れ御旅句集について相談もし且盡力を御願ひしたいつもりだつたのにもう逢へない。

力を貸しても貰らへない。

淋しいものだ、しかし君の殘した句は永遠に殘る事だ。しかも戀人の手に抱かれて死んだ君は幸福だと思ふ。合掌

悼

うたかたとなつて淨土へ旅立ちぬ

川柳になつた？ 新聞を檢討

―川柳指導講座第三回―

塚越正光

この集句を受とつたのが二月廿日だつた、それから一週間目にあの二・二六事件が起こつたのである、あの朝私は「婦女世界」の校正のために印刷所へ行つて居たが、午前十時には既に事件のあつたことを聞いた、然し私達はそれを單なるデマとして一笑に附し去つたが、次々に齎らされる情報はだんだん混沌として所謂流言蜚語型を備えて來た、ストーブの周圍はそれの情報と批判で喧々囂々である、私も朱筆を擱いては、幾度かその仲間へ入つた、その合間にはお互ひがそれぞれの傳手を求めて情報を蒐めたが、何處から何處までが信用出來るのか判然しなかつた。

待ちに待つた夕刊は奪ひ合ふ樣にして事件の片鱗をでも知らうとしたが……記事差止と承知して居ながら……一行だつて見つけ出すことが出來ない、ただ辛うじて經濟面の全國取引所が休業したことと明日も開市の見込みが立たぬといふ報道を發見して、その重大性を感知することを得ただけである。斯うなると常日頃新聞の出鱈目性や、媚情的な記事の扱ひ方に反感を持つたり、ジャーナリズムの輕跳振を非難して居たことなどはさらりと忘れて新聞に賴るほかには……生憎印刷所にも私の所にもラヂオがないから……手がないのにも拘はらず、新聞が使命を果して吳れないのだから、今度はそのことで腹が立つてならない、こんど東京へ來てから聽いたことだがあの日行動隊は聲明書を各社の夕刊へ掲載させようとしたが、各社ともゲラには組んだが掲載を躊躇した中で報知新聞だけが、一面へ載せてそこだけを鉛版を削つて刷つたが、處々聲明書の文言が讀める位の慌て方……或は意識的かも知れない……だつた、それが又事件の片鱗をでも知らうとする東京人を刺激して報知の夕刊は飛ぶやうに賣れたばかりではなく、以來何萬部とかの發行部數增加を見るに至つて、茲數年來沈滯氣味だつた同社がすつかり活況を呈してゐるといふことである。

これは當時如何に大衆がニュースに餓えて居たかといふことを窺ひ知る一つの證據でもある。

毎年四月三日は新聞社の公休で、その日の夕刊と翌四日の朝刊が休刊となるのだが、さてその時になるとつくづく新聞のないことが淋しまれてならない、朝食前後の手持無沙汰さつたらない、これほど私達の生活と切つても切れない仲にある新聞でありながら、それを製作する方の立場にある、所謂新聞人仲間では、一日でもいいから新聞から解放されて見たいとよく言つてゐる、そうした氣持を代辯してゐることで、宮尾しげを君の

新聞を見ぬ日うれしく旅に寢る

は新聞人に珍重されてゐる、然し諸君は恐らくそんな氣持を持たれまいと思ふが、とこんなことを考へながら、この集句を檢討してみることにする。

切捨御免新聞は罪なもの

新聞に對する批難の一つとして切捨御免がある、この作家はそれを題材とした、その着眼はよかつたのだが、新聞は罪なものといふだけなら敢てこれを川柳化するまでのことはない誰でも考へられることなので、それから先へ行つて貰ひたいのが私達の願ひなのである、だが切捨御免新聞はまで來て仕舞つては下五だけでは何うにもならなくなるのは當然である、そこでもう一應考へる勞をいとはなかつたら、切捨御免の新聞をテーマに作句することになる筈である、浮んだものをすぐさま句にまとめることは相當修業を積んだ作家のすることである。ではこの句を何うすればよいか、私ならこの傍若無人の新聞にも苦手のあることを句にして

新聞に苦手があつて面白し

とするが、この欄の作家にそこまで求めるのは酷であらう、ただそこまで行つて貰ひたいことをすすめる譯である。（句主　天王寺區讃華君）

新聞の火事どつきんと似た名前

この作家の言はうとしてゐることは、讀者諸君にもよくわかることと思ふ、だがわかることが川柳ではないことも既に承知されてゐる筈である、そこに作家に作家の表現苦があり、句語の發見があり、完成の喜びがあるので、私達は苦しまなければならない宿命をもつてゐる。

社會面友達に似た名が火元

少し諄いが原句を尊重して添削して見たのがこの句である、然し似てゐる名前でなく同名異人である方がもつと面白い句になると思ふ。（句主　島根縣　さわだ君）

食膳へ三面記事は樂しまれ

新聞が四ページ時代の三面は社會記事ときまつてゐたので、三面記事と呼ばれてゐた、それは新聞人の術語が一般化されたのであるから、現在では昔の三面を社會面と呼んでゐるのだから、句語としても變へなければ嘘である。そこで

夜の囁話題は社會面へ觸れ

として、夫婦差向ひでも一家團欒でも好きな方に解して貰ふことにして見た（句主　西區五三六君）

號外の手前正月だけは取つてやり

配達が擴張に備えて號外をいつも入れて呉れた、そのトリック好意でもいゝ……にひつかかつて正月だけとつてやるといふ新市域風景の點描であるが、これは正月だけには限らない、野球の時とか博覽會を催した時とか時期はいろいろある。

號外の手前來月だけを取り

とすればいつでもよいことになり、句の調子

もととのふ。（句主　東淀川區　澄風君）

新聞も浮かれた樣に花だより

浮かれた樣な記事の書き方をそのま句にしないで、浮かれてゐると斷定する方が現代的な作句法である、別に時代に迎合することも要らないが、强いて反對することもない、そこが不即不離の境地なのである、不即不離はひとり作句にばかりではなく、世に處するにもそれでなければならない。

酣の春新聞も浮かれきり

世間の浮かれてるのを冷かに見てゐる川柳家があつてもいい。（句主　兵庫縣　双亭）

夕刊を賣るさへ媚の瞳が要る世

世相の一端を捉えたのを可とするが下五が窮屈さを感じさせる、さういふ世の中だといふことまで句面へ出さうとするから、この窮屈さを感じさせてしまふので

夕刊を賣るだけにさへ媚を見せ

としただけで、東京なら丸ビル前、大阪なら阪急での夕刊賣りの女の子が、買ひ手の若いサラリーマンへ挑戰してゐるそれを思ひ出すことが出來るであらう。（句主　今治市　文庫君）

新聞の小說を讀む老いた母

耳が遠くなり、軀が利かなくなつた老婆が新聞ばかり丹念に讀むので、案外新しい智識を有つてゐるなどといふことはよくある、この小說が現代物であれば一層面白いと思つて

母の待つ新聞にある菊池寬

として見たが、ちと奇を衒ふ形がないでもない、老いた母といふ言葉のひびきと感じを嫌つて避けたのは、句主の首肯できないところかも知れない。（句主　東淀川區　小貝君）

取り敢へず新聞を通じて禮を述べ

何の禮なのかはつきりさせたい、作家だけに判つてゐても、私達は何の感銘も持ち得ない、そこで何か事柄を加へると

滿員のお禮と詫びを社會面

だが、句意とは遠いかも知れない、たゞ句だけを直すだけなら

取敢ず紙上を通じ禮を言ひ

でいいことになるが、私にはこれでは承服出來ない點があるとは前に言つた通りである。假名づかひ其他に就ては原句と對照されたい（句主　此花區　峯月君）

兩側の顏が近づく赤新聞

大阪で赤新聞とは煽情的な標題とエロ記事で賣る夕刊である……大阪以外の讀者のために……それを知つてないとこの句の句意が摑めない、赤新聞とか新聞賣とか六字のものを下五へ持つて行くと素人つぽく感じられるから上五へ持つて行く、といふ說もあるが、私はさうした便法を好かない、だからこの場合この句を添削すれば

赤新聞へ兩隣顏を寄せ

とするのだが、電車の中をはつきりさせるには

赤新聞を吊皮も覗き込み

となる、然し破調……五七五でない……の句は最初から手がけない方がよい、さういふ潔癖さは作句力を養へばとて決して削ぎはしない。（句主　東淀川區　靜城君）

新聞に切り取る母の彼所があり

彼所はかしよとでも讀ませるのかも知れないがそれなら箇所でなければいけない、もしあすこなら彼處である、それはそれとして切取る母のも言葉の配置が惡い、先輩の句に「家庭欄妻に切拔くものがあり」といふのがあるが、これは母なので、母の切拔く面を何だらうと考へて

ラヂオ版母丹念に歌詞を溜め

と添削して見たが、作者は不滿があるかも知

れない。（句主　松江市　譲二君）

新聞がめしより好きで又　遅　刻

私達の生活から切離せない新聞であるとしても、めしより好きは誇張が過ぎて可笑しくもない。

新聞へ見入つて箸が留守になり

ぐらゐのところでとめて置きたい（句主　北區　六郎君）

坊ちやんの獵奇赤新聞を　讀　み

この場合大阪辯でぼん〳〵のでもいいがそれよりは

奥様の獵奇　赤　新　聞　を　讀　み

の方がより効果的に思はれる。（句主　大阪いさむ君）

お土産を新聞紙で　渡　さ　れ　る

渡されるまでの一歩手前で止まると句になると思ふ、つまり

お土産は新聞紙に　包　ま　れ　る

で句意は通るからである。（句主　大阪府紫香君）

社説には御用の匂ひプンと來る

他の作家の氣付かない着想は題詠競吟の手段として上乘であるが、句がなつてゐなくては折角の着想を殺して仕舞ふ。

諤諤の社説に御用　紙　の　匂　ひ

なら社説の四角ばつた論調との對比も表はしてゐると思ふ。匂ひと置いてプンと來るではあまりに智惠がないとも思はれる。（句主　高松市、柳夢君）

廣告欄若き二人は待ち佗　び　る

「話ついた居所知らせ」の案内廣告を待佗びる男と女とまで解すのは私ばかりではあるまい、然しこの二人が「話ついた」を待佗びるのはトリックなのだから、それならもつと圖々しさを描き出したい慾が出て來て

廣告欄のめ〳〵生きてゐる二人

になつたが原句の意味が失はなければ幸ひである。（句主　仁川　奇文君）

新聞も　廓　に　近　き　紙　の　色

廓は廓の誤字と解して話をすゝめる、廓に近いので赤新聞が多く配達されるといふ意味なのだらうが、赤新聞の存在を知らない土地から見れば紙の色が不明といふことになる。赤新聞が一般家庭へ入らないからといつて、廓に近き町家が色町風になづむとは限らない、其處にこの句の嘘がある。要するに一人よがりの句といふことになる、第一赤新聞は呼賣が大部分で配達されるものは少い、配達されるものがあつたとしても恐らく毎日、朝日にその色は消されて仕舞ふであらう、讀者層をねらふなら他に表現の仕ようがある筈だと思ふ、敢て添削をしないで作家の研究心に俟つことにする。（句主　大阪市　世間音君）

新聞へ元は　重　役　顔　で　見　る

この句に對して約二時間あれこれと考へたが……その中にはお茶を服んだり、煙草も喫つたが……句意が摑めない、そこで別に意味のない句面通りとすれば、添削しても仕方がないことになる、この作家は恐らくまだ川柳を解してゐないのではなからうか、兎も角もつとひとの句を讀むことをすゝめる。（句主略）

地方版汽車は故郷を過ぎて來た

隨分親切に考へても、新聞發行地と新聞の屆く地方との中間に故郷を持つ男が、地方版を手にして故郷を思ふといふ廻りくどいことになる、私の考へ違ひのようにも思へる、句主の説明を求めた方が早さうである（句主略）

以下の五句は註解、添削を要しない謂はばこの集句の中の見本帳である、がこの見本帳

には色いささか褪せたのがなきにしもあらずである。

事もなく古新聞のよく溜り　奈良縣　青柳

立つてでも讀む氣夕刊買うてやり　北區　春巣

親類の自殺が出てる新聞紙　大阪府　柳狂

新聞をとられて父は連れ出され　東成區　呑空子

繁昌へ今日の新聞包まれる　天王寺區　葉光

發表が一ヶ月遅れたことをお詫びいたします、御承知のことと存じますが、これを原稿にしなければならない三月の上半期を自動車の奇禍で臥床、漸く治つて出社すると仕事が待つて居て、一週間でそれを片附けた途端に東京からの招電に接して、谷孫六氏の財教社へ入社「財の教」創刊準備に忙殺されて、漸く今日この原稿へ取りかかつた始末です、私事のためにみなさま並に川柳雑誌社に御迷惑をおかけしたのは申譯のないことですが、事情を御諒察下さつてお許し下さい、その代りに好い天氣の第一日曜を、三年ぶりで歸つた東京だのに遊びにも出ないで、責任を果して居るのです、どうぞお察し下さい。終りに大阪の柳友諸君に在阪中の御好誼を感謝し、御挨拶のいとまもなく歸京いたしました御無禮をお詫びいたします、併せて倍舊の御好誼を賜りますことと、みなさまの御健康を祈つてやみません。（昭和一一・四・五東京にて）

蝶印「ヤマハ・バンド」
ハーモニカ

ヤマハ バンド ハーモニカの評判は大したものです

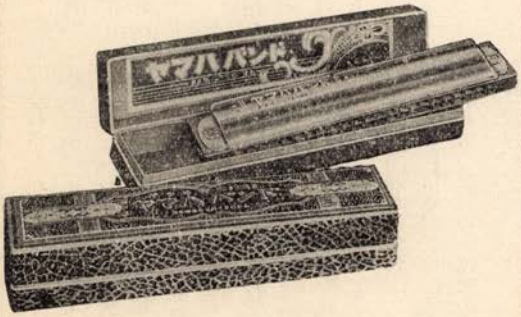
音も……質も……耐久も……意匠も……

申分のないハーモニカとは……

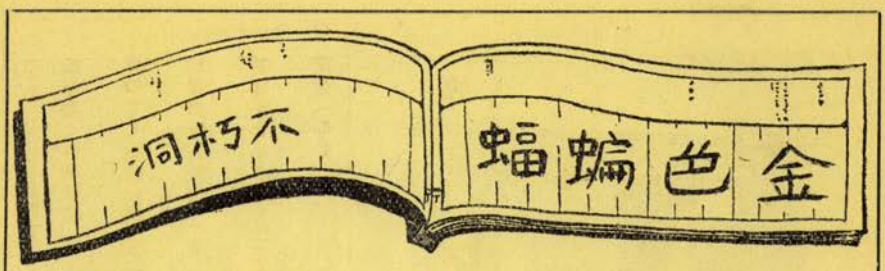
ヤマハ バンド ハーモニカの事

Special Made

20穴……¥1.50
21穴……¥1.70
23穴……¥2.10
24穴……¥2.30



製造發賣元
日本樂器會社大阪支店
大阪市西區四ツ橋南
電話新町一〇七三番



V

耳がクシャツク机上の鏡を覗くとピンと白髪が突ッ立つてゐる。それがギラ〳〵光つてゐるので、小さな西洋ハサミでチョン切つた。晩春初夏は惱ましい。

谷孫六の「財の教」が囁く。なんだか金をためることばかし、クドクドと書いてある。オイしつかりしろよと頭から叱られてゐるやうな氣もするが、俺の女房と俺とではダメだなアといふ氣もする。ふたりで川柳をつくり、ふたりで、語學の研究をやり、ふたりで酒をのみ、タバコを喫うてゐたんではお金のたまりつこはない。このコンビでは一生涯お金なんぞたまらないぞと氣がついてもう遲い。誰だい、そんなとこから、今からでも遲くないなんて彌次るのは……。

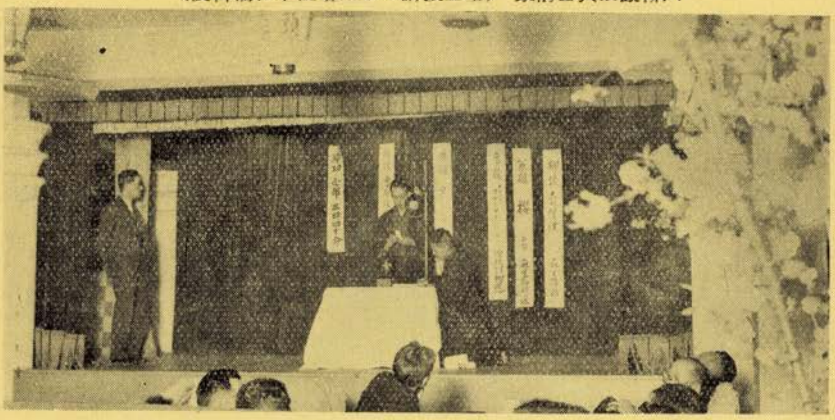
蛭子君から「貴四月號仲々賑やかなる御編輯興深く候「貴說子なき者への稅」には反對せざるを得ざる立場にあり、子なき者の寂しさが御同情願ひ度く、子寶はブルジョアなれば我慢も出來さうに候」云々の抗議があつたが、私は非常時國策の一端として提議しただけで子なき人の寂しさに對する同情は人一倍持合せてゐるつもりである。

子どものない寂びしさが、稅金を免除して貰つたからとて償へるものでないこともお考へが願ひたい。しかし子どものある人とない人とで生活のヨューを生み出す可能性が何れにあるかといふことも考へていただきたい。

私が往年勤めてゐた某會社の販賣部長A氏と廣告部長B氏との好適例をこゝに開陳して御參考に供したい。A氏は夫婦と女中の三人暮らしで子どものない寂びしさを味つてゐる人、B氏は夫婦と女の子三人、男の子二人の五人の子持である。ところで、A氏はB氏よりも月給が下である。が數萬金の邸宅に悠々書畫を愛好する生活を營み、B氏は次ぎ〳〵に結婚適齡期に入る女の子をかたづけ、男の子の教育費に追ひまくられ、退職金や賞與金を目當てに會社から前借してバランスを合してゐる始末である。B氏は夫婦二人で住むにはあまりに廣すぎる家に女中と三人で住み、A氏は家族七人では狹すぎる家に女中もなく生活する。斯うした矛盾は今の社會機構の上で到る處に發見出來やう。更に男の子を持つてゐれば徵兵による血稅を否應なしに拂はされるが子なき人々はこの血稅を何によつて拂つてゐるか。それは國民の義務であるといふ人が果してこの血稅をすべて拂つてゐるかどうか。私はすく大衆に或は下層階級に轉嫁出來ない稅金の增額をこの際、先づ考慮して而して後、大衆稅に及んでほしいのである。國策の上から萬止むを得ざる增稅こそ我等大衆の義務として負擔すべきものである。と信ずるのである。

子なき人の寂びしさは「よく寢れば寢るとてのぞく枕蚊帳」の眞の味を味はない不倖な

川柳觀櫻大會情景（壇上披講せるは增位本社編輯長）



人である。寢てゐても團扇の動く親心」の親心の出しやうのない氣の毒な人である。この點、私は蛭子君のやうな子のない人に滿腔の同情を捧げると同時に、近ごろ夫人の御健康がすぐれぬ由を聞き憂慮に堪えない。

五花村君の主宰してゐた「東北川柳」と三太郎君の主宰してゐる「川柳研究」が合併した。そして「川柳研究」が大きくなることになつた。これについてはいろ〳〵な意見もあらうが自分はいゝことだと思つてゐる。歴史的に云へば「東北川柳」が姿を消すことは淋びしいかも知れないが、今の柳界はそんなことを云つてゐる時ではない。力強い握手は將來の柳界をほゝえませるに充分であらう。遙に敬意を表し發展を祈つてゐる。

東洋一を誇るキャバレーマルタマの階上で開いた川柳觀櫻大會は氣分本位から云つて空前の句會であつた。我が社も犧牲を拂つたがマルタマの社長夫妻をはじめ、マルタマ樂團の人々、サービス滿點の麗人達の好意も又大きかつた。年に一二回はこんな集りもやりたいと思つてゐる。マルタマ少女歌劇は第一憧れのニーナ、第二結緣元祿風俗、第三ダルダネラ娘、第四花見音頭で力演これつとめてくれた。

次は三越七階の新裝大ホールで講演會か何か元氣のいゝことをやりたいと思つてゐる。既に會場を豫約してあるから、期待していたゞきたい。

北川あや美君が亡くなつた。拙宅のこどもたちとも親しくしてゐただけに、もう姿を見せてくれないのだと思うと寂びしい。川柳家には居所を知らさないで呉れといふ依頼もあつたのでしつかり養生をした方がいゝだらうと思つて、最近は手紙一つやらずに打すてゝ置いたので心殘りである。

もう餘程いゝのであらうとばかし思つてゐたら、羽衣の別莊で三月十八日になくなつたといふ知らせを二十九日に嚴父から受取つて驚かされた。翠夢君から「あや美句抄」が屆いたからこゝに揭げ、繼を獲て病に斃れた君を偲ぶよすがとしよう。

あや美句抄

人生の凡てを戀になげ出して

氣儘さを異性へだけはかくしてる
虚僞捨てゝ青春の血のたぎつて來
未來など忘れ女のあたゝかみ
馬鹿にする中に親身を見せてくれ
彼女だけ愛し消極的に居る
失戀へ我が名をかへんなぞ思ひ
忘れるにや戀のやけどの大き過ぎ
眞劍な戀を遊戯にされてゐる
小康の眼先へペルシヤ猫が來る

月末に野口雨情氏を土佐堀の京家に訪ねた幾年ぶりに合つた雨情氏の謹嚴な態度に變りはないが、頭髪が薄く白くなつてゐることは私のこゝろをさみしくさせた。一盃献じたいと思つて南へ誘つたが播州の高砂から迎えに來る人を待つてゐるので出掛けられないとのこと。それに近頃はリューマチで弱つてゐるので飲めないのですよと云ひながらも、私のためにビールを命じやうとされた。恰度そこへ高砂からのヴイジターがあつたので再會を約して引揚げた。

前號の校正で印刷屋へ頑張つた汀柳と史呂と私の三人、校正が濟んで、一度に空腹を感じた。道頓堀へ出るまでの辛棒が出來ないので福島で有名な「一富士」へ轉んげ込んだ。そでも酒を命じることを忘れない汀柳だつた。三人が眞ッ赤な顏で街頭へ飛び出した時には、徹宵痛飲したよりもより以上にトーゼンとしてゐた。「銚子二本だッせ」といふ史呂の聲に三人は思はず笑ひ出した。校正は斯くの如く私達にこゝろよき疲れを覺えさせるのである。こんなことを書いてもチト校正を手傳ひに來いといふ謎ではない。

—路郎—

川柳觀櫻大會情景（壇上マタイクロフオンを前に談柳する麻生本社主幹）

讀まなくてもいゝ頁

田の字内閣（あくびどめ）

廣田内閣が〝ひろ田〟内閣か、〝もろ田〟内閣か、そんな事は〝すい田〟方に考へて差支はないが、首相が廣田で、外務が有田、農林が島田で、鐵道が前田、拓務が永田で十三人中五人までが〝田〟の字のついた大臣である。

ところで、政務次官が又田の字盡しだ。遞信が前田で司法が野田、商工が池田で、拓務が稻田、都合四人を數へ、それに農林の田邊に、鐵道の田子のやうな、上に〝田〟の字のあるのまで加算すると六人になる。參與官の方でも、それにならつた譯ではあるまいが、海軍が永田で遞信が多田、文部が作田といふ具合にこのところ田の字大繁昌である。

廣田内閣に負けぬ氣を出して川柳雜誌社の同人から〝田〟の字を拾つて見た。福田（山雨樓）、住田、西田、永田、生田、廣田、姫田、眞田、朝田、福田（鶴峰）、吉田、岡田の十二人を算する。こちらにも廣田もゐれば永田もゐるところがうれしいではないか。

忘れちや川柳名人錄（いやよ）

書齋の整理をしてゐたら「大正名人錄」といふ本が出て來た。大正七年の刊行である。大正七年といへばかなり景氣のいゝ時である景氣でもよくなければ、こんな莫迦氣た本が賣れる筈もない。

あらゆる方面のナンバーワンを集めた本でパラパラ、ページを繰つてゐても一時間や二時間の時を消すには絶好の書である。尤もナンバーワンと云つても、いかゞはしいナンバーワンを包含してゐることは云うまでもない。試みに川柳家とした一項目を轉載して見やう。

東京芝二本榎二　井上劍花坊
同　下谷區上野櫻木町一八　飯沼鬼一郎
同　麻布市兵衛町一ノ一一　伊藤　順介
同　深川相川町九　伊藤　久坊
同　小石川戸崎町三四　堀野義母子
福島縣西白河郡五ヶ村　大谷五花村
名古屋熱田富江町五六　大曾根大吉
京都諏訪町松原南入　多田　孤山
靜岡縣藤枝町　大塚與一坊
東京下谷東黑門町二四越阪方　若柳吉之助
岡山市西中山下柳川筋　龜山寶年坊
東京淺草榮久町一八　吉川雉子郎
同　本郷湯島天神町三ノ三　吉田　一斗
同　市外巢鴨町　高木可久連峰
同　下谷車阪町　村田　鯛坊

同　牛込揚場町一三　窪田而笑子
同　淺草駒形五三　正木十千棒
相模國田代　松本　春花
京都姉小路麩屋町東入　藤本　蘭華
東京芝愛宕町一ノ二四　藤田小次郎
同淀橋町角筈七二九　近藤飴ン坊
岡山市門田屋敷七六　河野鐵羅漢
東京赤坂傳馬町一ノ六　五味　茶童
同　四谷坂町一五　寺井紅太郎
同　芝本芝四ノ二六　寺井　尺一
同　麴町内幸町一ノ五　寺澤素浪人
同　淺草馬道七ノ九　淺田きん笑
大阪西區江戸堀北通二ノ二〇　麻布　路郎
岡山縣勝田郡廣野村　安藤不二郎
横濱市中村町弘誓院　安藤幻怪坊
東京麴町富士見町法政大學横　阪井久良岐
同　麻布市兵衛町二ノ一九　佐瀨劍珍坊
同下谷東松下町二一　木津芥子郎
大阪市西區市岡町五六　岸本　水府
同　西區江戸堀大阪海上火災保險　三輪　強
東京京橋木挽町六ノ三　白石維想樓
同　青山原宿二八九　鈴木すゞ六

以上三十七人がイロハ順で列擧され、大正七年一月調としてある。當時の柳壇をこの三十七人で支配してゐたと考へることは意味のないことであるが、このうちの幾人かが柳壇に君臨してゐたことだけは間違ひのないところであらう。

右表を一讀して心づくことはこの調査なるものが劍花坊を訪れて出來上つたものではないかと想像されるほど劍花坊系の人たちの多いことである。尤も劍花坊旺んなりし頃であつたこともソロバンに入れる必要はあるが、それにしてもさう考へて間違ひのなささうな匂ひがするのである。更にこれ等の作家を仔細に點檢すると、既に鬼籍に入つた人々、全然柳壇を去つた人々、兎糞的に作句してゐる人々、今猶第一線に立つて柳壇に君臨してゐる人々とがある。

死亡した人々には劍花坊、大吉、而笑子、春花、飴ン坊、幻怪坊などで、雉子郎が吉川英治となつて大衆文藝へ轉じたのが轉向派の第一人者であらう。現柳界に今なほその名を謳はれてゐる人々では五花村、可久逋峰（角戀坊）、鯛坊（周魚）、蘭華（福浩）、紅太郎、路郎、久良岐（久良伎）、水府、維想樓の諸君であらう。（括弧の中は現在使用してゐる雅號）以上の人々にしても住所の變らないのはおそらく蘭華一人ではないかと思はれるが、それすらも改號してゐるのであるから、明治大正、昭和の川柳史を編むとすれば、その變遷の甚しいのに一驚を喫するであらう。

高級・・・
撞球場開設
ローテーション　一臺
ポケット　四ツ玉　二臺

玉突を詠んだ川柳

いつ稽古したか重役五十撞き
玉突屋普より早く聲があり
球を撞く片眼に泌みる卷煙草
隅の球きつと見据える大廻し
引き球へ身になるやうな顎をひき
寄せ球はないしよ話のていたらく
てぬぐひとしやぼん玉突屋へ忘れ
仲のよい姉妹がゐる玉突屋
突切つて淡い誇りの中にゐる
御曾子この玉突で戀が出來

大阪市上本町四丁目
バス停留所西ノ四ツ辻南
ビリヤード　川柳
電話南六四四番

ンアフ性女と塚寶

川寺

非常時、非常時のかけ聲喧しく、緊めつけられる今日の世相が、遠因して例へ短時間の間でも、ホッとした息拔を見出したいと願ふ要求からか、「寶塚」「松竹」の二大レヴュウ團を初め、曰く何、曰く何と、レヴュウまがいのものゝ簇出するのは今日ほど盛なことは、未だ嘗てなかつた處である。

レヴュウといふものは、劇などと違つて、七むつかしい人生觀や世界觀と、いつたやうな哲學が裏付られてゐるのでなく、面倒な理論や理智を働せる必要のない、所謂、スペクタクル（視覺的とでも申しませうか）で、見た眼美しく幻想的で、ポーッと夢見心地になつて生活の憂悶や重壓から、一寸ばかり麻睡に近い逃避が出來ればよいので、これが、世界的に大流行を來たしてゐる次第であるらしく、歐米では下火になつたとは云へ大戰直後の如ではないとしても、紐育、巴里其他の大都では、大阪、東京と同じやうに、レヴュウやそれに似たものが大歡迎されてゐるらしいのである。

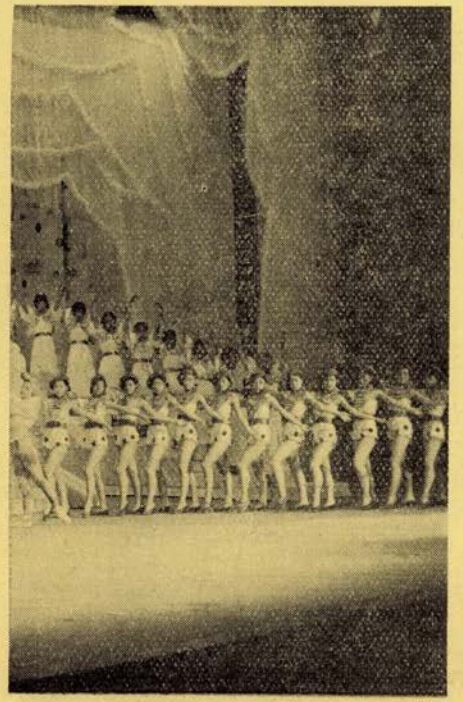
×

此處には、齒の浮くやうなレヴュウ藝術論などを列べるのが目的ではないが、寶塚少女歌劇といふものが、如何に全國的に人氣を博し、そのファンの熱狂振の想像も及ばないもので、あるかをお話する以前に、レヴュウが「現代日本」に迎へられる必然性から出發しないと條理と順序が立たないと思つたからである（又、淺黄裏になりかけた。…）

×

「寶塚」の觀客層は（東寶は勿論名古屋、京都皆然り）婦人が七割で、後の三分が青年、中年、老年の男である。

其七割の婦人の八十パーセントが女學生なら二、三年級程度の年齢の少女達。其他十パーセントが女學校出たての娘さん及び若



相殊特の

信

夫人、其殘りがお婆さんといふ割當になつてゐる。

その證據は、八月などの劇場街にとつて霜枯れ時が「寶塚」では、學校休みで、お客樣の激減する書入れ時となるのでも明で、毎年一月と、八月に「歌劇」愛讀者大會と稱して普段の毎月の公演は花組なら花組だけで、それに聲專、又は專屬のダンス專科(花組ならA組といふ風に)が加はるだけであるが、この大會は、東寶其他に出張してゐない寶塚にゐる各組(例へば花組が東京に行つてゐるなら、殘りの月、雪、星の各組)が合同して、明星連が稀有な顏合せをするので、人氣は沸騰するのであるが、この大會の日場内の文字通り立錐の餘地なき一衆の大部分が若い婦人達で、身動くもならぬ、大廊下の雜踏する光景がさながら花束をまき散らした如である。(これは知らぬ人には見せたいといつも思ふのである)

それから場内の賣店を始め、大阪、東京其他の都市での繪葉書店の軒先を飾る花形生徒のブロマイドである。これも十年前は春日花子とか音羽瀧子、紅千鶴と云つた風の娘役ばかりが盛んに賣れたのが。最近では刈上げの一見男とまで思ふ男役、小夜福子、葦原邦子、汐見洋子、春日野八千代、宇知川智子と云つた人々のものばかりが飛ぶやうに賣れる。十六七歳の娘さんが十圓紙幣を

寶塚少女歌劇の豪華絢爛なレヴュー大詰の舞臺面

ポンと抛り出して、數十種を一人で買つて行く。勿論繪葉書屋の娘さんではない、それ位に驚いてはいけない、小夜ファンとか葦原ファンとか稱する婦人達になると、金錢に糸目をつけず苟も小夜福子、葦原邦子の顏や姿の出てゐる雜誌、繪葉書、ハンカチーフ、人形、お菓子、何でも彼でも買占めるのである。似顏繪展覽會でもあると、ファンは自分の好きな人の繪は他人手に渡すまいと先を爭つて賣約する。

――斯うした熱意は女性ファンに限るらしい。

×

小夜、葦原に限らない、其他誰でもよろしい、自分の好きなスターの出演してゐる公演には、「寶塚」（「東寶」其他でも同じこと）などでは同じものを二回、三回は生やさしい方で十回以上が普通で、如何に無性なファンでも初日と樂の日を見逃しては佶券にかゝはるのである。

ファンの難關は良い座席券を手に入れることで、梅田、神戸の阪急驛で十日前から豫約はしてゐるが、殊に良い座券は「當日賣」に殘されてゐる、これはどうしても寶塚の改札に迄出かけなければならない。寶塚新溫泉では午前九時に入口を開けるのであるがファンの娘さん達は午前五時からつめかけて開門迄の數時間を行列つくつて待つのである、八月の炎日も十二月一月の極寒も變らないのであるから驚嘆の外はない、良家の人達になると番頭、丁稚、書生、下女等を派してこの苦業に從はしめる。

殊に甚しいのは、前記の愛讀者大會で、前夜の八時頃から、藥や新聞紙を敷いて門前に徹宵するのだから大變である。これは實見した人でないと容易に信じられないだらう。

×

公演はて丶の歸途、花形生徒の歸りを待つ樂屋にのファンの美しい大群、これもみものである、監視人がゐるので扉口を遠卷にして十重二十重にかこみ、花束やお菓子折をもつてゐる人も少くない、プロマイドやサインブックを手にして、サイン攻めにしやうと待機してゐる女學生群もゐる。

其處へ小夜とか葦原などといふやうな人々が現出すると大變である、ファンの渦卷は混亂する、そして停留場の方へ後からゾロ〳〵ついて行く、一種の美しい行列をなすこととなる。

スター生徒が乘込んだ電車は斯うしたファンが我も我も、もむやうにして殺倒する。

×

處が「寶塚」ファンの特色は花形スターを、お友達と見、畏敬して、少しも舞臺人としての輕視を以てしないことである。

これは「寶塚」は「生徒」であつて「女優」でないことがファンによく徹してゐることと、ファンが一種の擁護者兼監視人とでもいつた格で、この神聖で純潔な「生徒」を少しでも汚さうとする者をかしやくしないことである。

新聞雜誌の妙な廣告に、若しも「寶塚」の生徒の寫眞が使用されてゐると注進してくる、某の雜誌の口繪には女優並に取扱つてあるから怪しからぬ、とか某紙の批評は寶塚への認識不足だから抗議しろとか、忠言がやかましい。

昔ならば、瀨川路考とか、近代でも歌右衛門老の福助時代は、滿都上下の子女が熱狂したものであるが、現代では婦人、令孃達は異性たる俳優に傾倒して如何はしい風評を受けるより、同性の斯うした「男裝」の「麗人」に親しくする方が安全であり、且つ興味も多いからで其點、時代は進み、女性も著しく賢くなつたと見られる、理由は云はない。

×

書けば際限がないから今回は此邊で。……

近作柳樽

路郎選

押賣に見縊られまい聲で居る　　長野　柳兒
吾が閥の落目左遷となりにけり　　同
子の數の話し袷衿まで明かし　　同
唇をぬすまれる夫人も隙があり　　十三　牧人
服務規律にも憎まれろとありや　　同
モートルの多額議員にする唸り　　同
兒の言葉案外痛いとこに觸れ　　今治　文庫
叱るのが日課のやうに賢婦人　　同
大鳥居一旗擧げた名を刻み　　同
エンジンの響の中のかたおもひ　　松江　比呂志
宵寢して一人の春をまぎらさん　　同
賣ツ奴の誇りあさまし掏摸に似て　　同

父の言葉そらして母の朗らかさ　松山　靈子

押の一手が俺を見すてた　同

叱られる事も女は數に入れ　同

我も子もせめて藥價のなかりせば　布施　秋無草

圍はれの母とは知らぬランドセル　同

褌で漕げて日本をうれしがり　同

胃袋の強く枯木の如く寢る　東京　半彌

輕石のなんと親しき湯氣の中　同

その朝を殿御はなほも寢てござる　仁川　可宵

年下の美目秀麗金がなし　同

月賦は解消せず債券のくじを待つ　大阪　一六

知人H氏の計報を聞く

歩く稽古が見納めとは悲し　同

上役の的のちがつた叱りやう　今治　心府

皮算用半分眞面目に聞いてやり　同

片倉製紙工場を參觀す

ハンストもなくてうれしき噴煙よ　松江　抱月

愛情をこめし料理の好き嫌ひ　同

女將今日叔父さんと云ふ人に會ひ　大阪　いさむ
親友として受付を頼まれる　同
停年の日が近づきぬ櫻咲く　名古屋　兄
お他力を土臺に運のよい男　同　兄
預り所出た自轉車は拔いて行き　東京　四塊
自分では醉つてない氣が酌ぎこぼし　同
音樂會社交は辛きものと知り　大阪　いの助
文藝の解る署長の人間味　同
美しい刺繍にこんな裏があり　伊豫　富美女
鹽昆布サラ〳〵と〳〵畫がすみ　同
いさかへば姉が默つた毛絲針　松江　榮之進
かへされた龜が借金ぬけきれず　同
ランドセルつけた子供を守が負ひ　朝鮮　石燈籠
病院へ春のなやみが訪づれる　同
もう少し梯子が足りぬ雀の巢　竹原　馬古山敗ノ速射砲
うらぶれの身を飯臺へせまく坐し　同
會社よく變へる女にある理想　熊本　宗山
組立てのビルを見て來る春の風　同

闘へとばかりいのちの灯が消えず　神戸　麥一

指切りをした夜の月が眼に泌みる　同　竹原　蛙庵

公職を金で買ひたい氣にもなり　同

算盤をはじくに太い指でした　神戸　喜斗平

灰皿とみかんと本と朝寝する　同

アスファルトまだ飲みたらぬ星を見る　大阪　七歩

食ひもせぬ冷い鮒を釣りつゞけ　同

アトリエの繪になる姿今日も寝る　山口　狂路

しばらくは臨時雇ひの名でつかひ　同

洗濯屋氣象通報だけをきゝ　大阪　源太

日給も知らずに鶏が鳴いてくれ　同

春近きみかんの味となりました　名古屋　蕪人

春マント喧嘩に強い手をかくし　同

春愁の眉毛をながながく引く　大隈　菊路

本人の知らぬ見合の日が極り　同

去ぬつもり去なすつもりが又孕み　神戸　朝雨

欺されてゐてやらうとは上があり　同

散郷へ歸る姿が借着なり

硝子越し湯氣ごし妻は風呂にゐる　松江　圭之介

氣ごゝろはつめたく見へるプロフイル　同

母性愛父の意見へ口をきゝ　尼崎　觀月

いつはらぬ姿よ指をくわへたる　同

父危篤スキー列車に乘り合せ　神戸　海中金

別れると云ひ張つた夜の星の數　同

買はれゆく工場一日音がなし　長野　有爲郎

人妻の指輪みだらにおもはるゝ　同

愚痴ばかり變體假名の母の文　名古屋　堯子

銀狐お互ひ同士ふりむかず　同

御聖姿は殊し新聞使はれる　尼崎　正柳

病院の門運ちやんは拔目なし　同

早退けの働く音の中に寢る　博多　玄風

身に過ぎた妻と言はれて氣が合はず　同

腕時計時をみてから音をきゝ　宇治　曉童

號外へはずかしく出る長じばん　同

粕汁に姿ほんのり櫻いろ　大和　翠峯

編棒の電車込ふが込まいが　同

せめてもの友へ新刊差入す　申河内　正一

兄貴分といふ兵兒帶の巾を見せ　同

流行歌心の痛い客もあり　加古川　天秋

殘業の歸りの風も春近し　同

女ばかりならこそこれで濟む對象　竹原　都子

押し賣へナンダ〳〵と男出る　同

逃がれてたとこで新聞社のカメラ　柏原　公子

轉宅の噂が春の風にのり　同

絶景へ立せて妻を又寫し　竹原　芳泉

來てみれば此處もお金を使ふとこ　同

傷心へラヂオは春の踊りなり　十三　獏

手がふれるまでを火鉢が取持ちて　同

支那栗の袋尙寒きビルディング　神戸　九葉

金持の拍手の中にシヤリアピン　同

世辭巧く言へて淋しい折鞄　金澤　立帆

春風に女袂を裏がへす　同

事務的な貸付係聲高し　十三　琴泉

無代進呈弱點で儲けてる　同

すきな値にしなはれ投賣くたびれる　神戸　吉左右
三年になるよと家主苗をくれ　同
嫌怠期積立金が滿期です　今治　虻の麿
良い事があつたか傘を忘れて來　同
昇給のいまだ曉ばかり喫ふ　大阪　光一
鯉幟おんなじ向きに愛想なし　同
お上手に前の課長を惡く云ひ　石川　しとし
潤む瞳を見せまいとして子を叱り　同
洋服と見れば禮する山の子等　伯耆　起人
一癖もあつて懷手の男　同
我子等の心の太陽となつてやろ　大阪　利生
くちづけもせずに今宵は歸へるなり　同
底冷える旅の花街を通り拔け　今治　輝親
打ち開けて呉れぬ女の掌のかたさ　同
忠告を素直に聽かれ淋しがり　大阪　大佛
寒行の袷に白粉消へ殘り　同
はくらい豚と云はれる女貯めてゐる　松江　蘭蝶
髪光り靴光らせてボーイなり　同

禮儀正しい吃の挨拶　大阪　葉光

中耳炎の子がよく笑ひ雪とける　同　水客

純喫茶一寸いゝ娘へよく流行り　山口　悲戀坊

新舊の縺れへ他人口を切り　大阪　澄風

サンドイッチ二人の愛は貫くもの　鹿川　樗柿

羽根ペンを使ふ少女のインキ壺　大阪　靜城

臺灣旅行より

生蕃の家神代をば想はせる　今治　里子

田も枯れて此處も工場が立つらしい　大阪　紫香

戀すれば街の灯おぼろ波おぼろ　松江　須磨夫

人絹に冷めたく人の肌さはり　信州　千隈

天井の木目世の中おもろなし　大阪　天國

唄ふ妓の咽喉の不思議をみつめたり　島根　さわだ

丁寧な挨拶嫁ぎゆく、從妹　大阪　靜路

王仁の額下ろして父はもの云はず　今治　憲一

訓練生銀座通りを歌で行き　東京　魔公

春が來てねだられてゐる三輪車　大阪　有耕

煮え切らぬ態度は惚れてゐるからさ　今治　一風

アカサタナハマヤラワでも子は眠り　大阪　竹阿彌
悪友と名のつくころはいゝ度胸　尼崎　斗風
附纏ふ子供に今日の苦を忘れ　大阪　古杖
酒倉のひつそりかんと陽が流れ　伊豫　京司
慰める積り二人で憤慨し　大阪　伊紗緒
修養のページを妻は飛ばして見　朝鮮　東狂子
神さまを知らない幸福さもあつた　螢ケ池　一更
信託會社などに縁なき我生活　大阪　寒草
乳呑子に妻をとられた夜が淋し　竹原　蛙庵
滿ち足りてかむ澤庵の音高し　朝鮮　悪源太
洗濯の好きな女に春が來る　大阪　さいち
子寶へ若い女房の世帶じみ　伯耆　小判
資本論差入屋だけが潤ふた　南河内　自由郎
小市民的諦觀朝寝してゐたり　大阪　草笛
菓子箱を入物にする女の子　神戸　凡樂
地下足袋へ疲れを見せて歸り着き　朝鮮　キミ女
赤い灯へバンプ氣どつた片靨　大阪　十九柳
殘月の俺と同じ歩みかな　神戸　古城

激昂へ妻やんはりとお茶を入れ　朝鮮　當峨山

商賣はこれから夕刊讀む女給　神戸　陽出男

レコード屋覺えかゝると次をかけ　名古屋　正穂

演說會懷爐を持つた人がゐる　大阪　新七

惡友をちやんと知つてる許嫁　奈良　青柿

愛される事も苦るしい病み續き　山口　美沙女

結局は富士を賞めてる歸朝談　名古屋　しげる

ルンペンと野良犬

寒い夜だ俺等と寢よう捨犬よ　寶屋　井乃蛙

珠數を持つ姿も母になりしなり　石川　義風子

貞操は確く守つてフラッパー　松江　登美也

父の死後死亡廣告目を通し　大阪　春巢

お隣の六尺干せる顏と會ひ　神戸　木履

アノ拗ねたとこが丹那の御意に召し　大阪　觀潮樓

薄情に成れとまばたく都會の灯　東京　双亭

改姓もうれしいものゝ一つにて　霞川　笑朗

こなみじん硝石ぎらぎら世紀末　大阪　卜居

牛乳屋時に營養價を話し　串本　晴二

往診に行く自動車は儲けたな　松江　讓二
うたた寝に寝間が敷けてる子の知らせ　大阪　せいち
智慧貸した女どこやらひきしまり　高知　柳香
律義もの清き一票持て餘し　高知　柳夢
椿落つ音が誰かの來る音か　大阪　みきを
厚化粧して獨身を見すかされ　神戸　蘇堂
共稼ぎビルの二階と下で事務　大阪　方眠
床屋から村騒がせの髭が出た　伊豫　九紫
省電のドアーでへだてられて戀　姫路　敏朗
愛情と云ふにはすぎる父の鞭　十三　鐵心
詐された同志が詐すネオンの灯　堺　柳昌
認識の角度々々が面白し　大阪　沐天
お隣のラヂオが切れて湯を上る　摂天　明陵

父の死

佛壇の燈りを消して徳をほめ　明石　秀太
弟を二人ですよと引眉毛　甍ケ池　千代吉
子の惱みを乘せて汽車の進みよう　朝鮮　骨人
ひもじさは茶椀にコツリ齒があたり　靈川　章泉

川柳時評

東京から（五）

高須啞三味

おもひで吟社の仕事

川柳おもひで吟社から、三浦太郎丸君の句集が出版された。同吟社からは、これで二册句集が出版されたわけで、最初の句集としては、去年の五月、同吟社を率ゐてゐる河柳雨吉君の「柳風雨調」が出、それから約一年目で今度の句集が出たわけである。

勿論、今度の句集は、三月に發行されたもので、その三月八日に出版記念句會をして、當日東京柳人にその句集を頒布しようとしたのであるが、二・二六事件でその會が四月三日に延期されたので、東京柳人の多くは、この句集を四月になつてから見たわけである。それで、僕もこれを四月の時評に取上げたのである。

想へば、由來句集出版に緣の遠かつた東京から、今年はこれで三册の句集が出たわけである。先づ一月に富士野鞍馬氏の「川柳鞍馬集」次がこの三浦太郎丸君の川柳句集「蔓」それと前後して和田天民氏の「昭和十年川柳特選集」であるが、これは東京柳壇としては最近の股賑さを如實に物語るもので、先づ先づよろこぶべきことの一つと言はなければならない。といふことは、昨年は一ヶ年を通じて、今年のこの四月までと同じ成績しか擧げてゐないからである。

川柳の句集を、計畫的に刊行するといふことは、その一般的愛好者の數、即ち購讀される數の問題從つて經濟的の理由から、非常に

困難なことにされてゐる。それで川柳句集の出版といへば、從來ほとんど自費出版ときまつてゐたのは、現在の日本詩壇に於ける詩集と同じ現象で甚だ光榮の至りだがそんなわけで、作品の性質とか、その人の仕事とかさういふ實質的なものはまるで目安に置かれず、まあ金のある川柳家か、でなければ何か機會のあつた場合（多くはその人の死んだ場合）初めて句集が出されてゐたのである。

所が、それに少し例外があつて、去年まで京都市北白川伊織町にあつた川柳叢書刊行會では、一冊二十五錢といふ低廉の定價で、川柳句集を幾つか出してくれた。僕の買つただけを算へて見ても、次の通り九種に及んでゐる。

木村半文錢句集
柳舟・六好・富士子句集
川上日東句集
黑木鵜足句集
本田溪花坊句集
柳珍堂・ひさご句集
川柳街第一句集
藤村青明句集（二冊）
大谷五花村句集

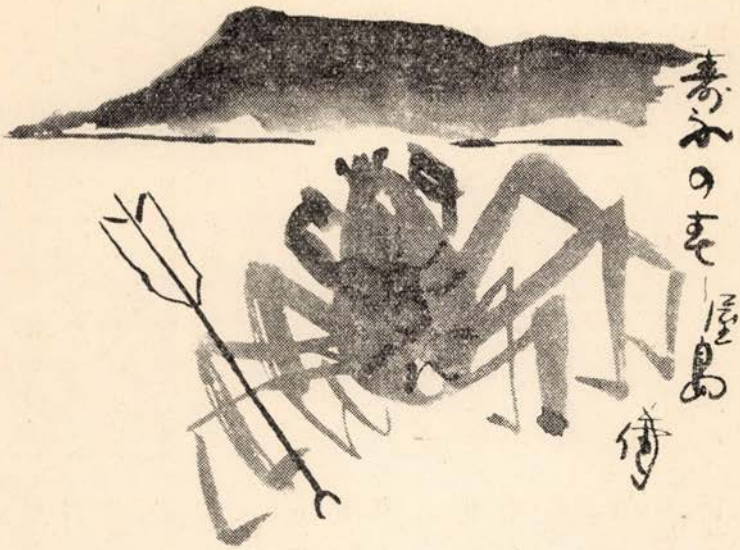
（なほこの他に、齋藤松窓句集、藤本福造句集などある筈であるが、僕は入手出來なかつた。）

それで、この川柳叢書刊行會の仕事には、僕は非常に感謝してゐたのであつたが、その主宰者村岸清堂氏が神戸へ移られてから、その活動を停止されたのは、さびしいきはみである。――その後を繼承してやつてゐる人があるとは聞いたが、具體的の仕事は村岸氏の後は少しもされてゐないらしいのだから、さびしい。

そこへ、去年から東京のおもひで吟社で、句集の刊行を聲明し、前述の通り第一に河柳雨吉句集、第二に三浦太郎丸句集を出したのであるから、僕は非常に悦んでゐるわけなのである。出版物などといふものは、何處で出たつて同じわけのものなのだが、今までの刊行會が京都で、次々に句集を出されるのは、少し物足りなかつた。何となく隔靴搔痒の感で、本も爲替で買ふといふ感じは、どうも親しみがないものである。それが今度は東京でどしどし句集を出してくれようといふのだから、おもひで吟社の仕事は、僕にとつては有難すぎる仕事なのである。

おもひで吟社よ、たとひ一年に一冊づつでもいゝから、その聲明通り、前田雀郎句集も川上三太郎句集も、どうか次々と出版して頂きたい。そして希くは、第二雨吉句集、第二太郎丸句集と、眞の川柳詩を一般に傳へる句集を、續々と出版して頂きたいものである。これは恐らく僕ばかりのねがひでなく、東京柳壇の柳人ひいては全日本柳人のねがひと思ふが故に、おもひで吟社へ感謝と共に、希望しておく次第である。

× × ×



平家盤無念無念の背で賣れ　木履

日本名所名物川柳

（四國の巻）

前田五健選並畫

（六）屋島

何氣なく開いた窓に月屋島　廉夫

昨日の話も出たり談古嶺　柳夢

末孫の漁船が浮かぶ船隱し　船哉

説明もなく遊船へ屋島見へ　狸公三

案内は見たように云ふ談古嶺　文庫

屋島まで來て大阪をなつかしみ　曉童

談古嶺具足をつけた氣で覗き　同

うつかりと登れば屋島島でなし　英賀夫
スタンプの趣味に屋島の風をほめ　ゆずらん
ケーブルに刻々屋島景を展べ　同
左舷へ人寄つて來て屋島見る　陽出男
屋島臺春を見下ろす景に出來　柳石
屋根から受ける感じは古戰場　勝人
船からは船室母艦の樣に見へ　竹阿彌
談古嶺赤白の旗瞳に浮び　世間音
靈巖へ登り靈巖探して見　鶴聲
蟹の目に屋島の浪と春の月　葉光
談古嶺那須の與市が眼のあたり　三汀
ケーブルを降りて屋島の景となり　九紫
大阪の訛へ屋島鬼ヶ島　宵明
ケーブルの客に買はれた平家蟹　同
傘させば屋島は雨に美しき　鮎美
朝日より夕日が心ひく屋島　世間音
獅子巖の鼻先あたり玉藻城　秋無草
ケーブルを登れば屋島岡續き　水客
源平の古器にひまどる屋島寺　木履
かはらけの落つる邊が夢の跡　柳石
海上を眺めて屋島思ふこと　勝人
源平史屋島の景に活を入れ　五健

「屋島」の概要

讃岐高松市の東、内海へ突出する火山臺地にして自ら南嶺、北嶺に分れ東麓は源平古戰場、西に獅子靈岩、東に談古嶺、中央に屋島（寺四國靈場八十四ヶ所札所）あり臺上一帶平坦なる小松原に廻遊道路ありて史跡と風光双絶の名所である。（健）

日本名所

京都の卷　選者　山川紫明氏

（七）**新京極**　〆切五月二十日

（八）**智恩院**　〆切五月三十日

名物川柳を募る

宛先本社事務所・用紙ハガキに限る

一路集

募集句

渚

住田亂耽選

蟹と戯る子の尻へ春の潮　木履心中と知れた渚の人だかり　玄風
渚行く戀の終りの心なり　草笛泣きにゆく渚は舟があるもよし　水客
弟に渚の宵を走り敗け　さわだ親のない子の足へくる春の波　同
啄木の或る日渚の蟹と居る　葉光貫一とお宮渚のロケーション　いの助
いつまでも歸ろとしない渚の子　山月漁夫一人渚傳ひに遠ざかり　同
ハッキリと渚昨夜の荒れを見せ　惡源太キャンバスを据える渚に富士が見え　四塊
二人の話渚へ出て續き　キミ女渚まで庭下駄で來るいゝ身分　同
胸を病むらしき姿の渚に居　文庫(人)吾が生命知つて渚の深呼吸　蘇堂
流星を見つけ淋しい渚なり　幸捐(地)渚から丈夫になつた夫人來る　半彌
濱の子に水平線の晴れ渡り　兄兄(天)足跡をさらつて渚陽が沈み　秋無草

誕生

市場没食子選

誕生日お膳に見えし親心凡　樂子澤山心ばかりの鯛がある　竹阿彌
男子生れ候と來る節句前春　巣誕生日祝の御飯焚いて臭れ　琵琶子
又誕生五人目にして初幟り小貝　貧しくも子の誕生に頭つき半　彌

川柳家戸籍調（續）

（係）　綠雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（450）　杉原朴泉

（1）杉原勇、（2）朴泉、（3）大正五年三月二十五日、（4）島根縣簸川郡高松村、（5）同縣大原郡加茂町、（6）製菓業、（7）置電燈一只一册の聖書あり（路郎師）、（8）射的場の眞赤な幕が笑つたな、（9）討論、讀書（10）何れもなし、（11）酒、讀書を邪魔する奴、（12）昭和七年七月大地吟社句會に出席九年大地、十年高松の同人となる。

（451）　町田承春

（1）町田健、（2）承春、（3）明治卅九年八月卅一日、（4）愛媛縣、（5）廣島縣竹原町、（6）藝備銀行竹原支店、（7）酒とろり〳〵大空の心かも（路郎）、どちらから吹いても春の風はよし（五健）、赤松のみどりが僕を生んだ村（山雨楼）、其の他澤山あり

誕生日末ッ子だけがあまへて居　章泉
面白く父が醉ふてる誕生日　靜城
誕生へ父は氣嫌の謠なり　有耕
飲む癖を露骨に父の誕生日　いさむ
誕生へ母もホンノリ醉ふてくれ　骨人坊
母の無い子へ誕生のせまるなり　小判
書留が來るお妾の誕生日　狸公三
誕生へネクタイ贈る許婚　澄風
誕生日許婚も來て灯が明い　遠見路
花婚の候補者を招く誕生日　葉光
誕生日だとて一本つけてくれ　紫香
誕生日禁酒の誓ひ破れかけ　惡源太
誕生の寫眞坊やに出來過ぎる　斗風
アルバムのトップ滿一歳の顏　蘇堂
誕生日難產なりし事も云ひ　方眠
誕生日尋一になる御目出度さ　柳夢
誕生日病める子供を淋しがり　美知夫
誕生日だけを上座に坐らされ　玄月
一誕生二貫五百でよく笑ひ　井の蛙
一誕生偉い〳〵で立つて見せ　古杖
初誕生ちと早過ぎる靴を買ひ　正穗
誕生で言へば一日兄貴なり　正柳
誕生の日記一ぱい書いてゐる　文庫
日記やゝ書く事がある誕生日　寒草
四年目に一回だけの日に生れ　東狂子
生活苦子に誕生日教へられ　水客
子が出來て苦しいけれど平和ですしげる　心して祝へ誕生死があるぞ　銀濤
生き伸びて又も迎えた誕生日　菊路
出世する見込もたゝず誕生日　秋無草
戸籍とは違ふ誕生日を迎え　兄兄
誕生日短い服もうれしくて　青柿
誕生を祝ふに悲しく不倫の兒　双亭
幸福な元旦と云ふ誕生日　いの助
元旦の僕の誕生忘れられ　石燈籠
誕生の子の親同志よく話し　幸捐
誕生の報せに一家春めいて　十九柳
誕生を尋ねる方も抱いてゐる　勝人
誕生にやつと認知の公事に勝ち　雌雄
健康を兎に角祝す誕生日　寮正
誕生日鯛の眞中拐るなり　草笛
友一人伴れて歸つた誕生日　雅幽
(秀)人形の足が折れてる誕生日　白峰
(同)勿體ないが忘れる親の誕生日　キミ女
(同)誕生もかちあつてゐる仲のよさ　當峨山
(同)あぐらの中へ入れて呑む子の誕生日　峯月
(同)誕生日故郷は遠いバーの宵　幸子
(同)お目出度が重なり合ふた誕生日　菊路
(同)希望儚く誕生をひとりぼち　さわだ
(同)こつそりと内輪で祝ふ誕生日　世間香
(同)張り替へた障子は骨にする誕生　山月
(同)誕生日忘れ働き盛りなり　雅幽
(人)片言の誕生を聞く乳母車　山月
(同)誕生日開けると笑ふ物をくれ　草笛
(地)誕生日二人は若い角砂糖　木屑
(天)誕生日を目出度がられて耳遠し　雅幽
(軸)貧乏のバトンを受けに生れし日　沒食子

ます、(8)反省のみんな詫びたい事ばかり(9)謠曲、釣、尺八、登山、(10)妻、二男(11)無信心者、(12)昭和五年春頃、松山海南川柳へ投句以來。

(452)　日吉一夫

(1)日吉一夫、(2)なし、(3)明治三十六年一月十二日、(4)大阪府中河内郡大正村大字木之本、(5)大阪市港區壽町二丁目二番地、(6)編輯校正、(7)艶歌師の妻の背の兒よ冴ゆる(昭和五年頃　山本雨迷作)、(8)なし、(9)スポーツ特に庭球、(10)子供なし、(11)外廓だけのもの、(12)昭和三年頃「たまむし」へ句作發表、その後、同社同人となり、主として評論擔當。同社解散後は休眠。

(453)　谷口寒草

(1)谷口煥三、(2)寒草、(3)明治四十四年一月九日、(4)大阪市南區瓦屋町三番丁六三、(5)大阪市此花區今開町一ノ五九、(6)關西硫酸販賣株式會社、(7)光り並ぶ汝等だけの君ならず(劍花坊)、(8)酒に問ふ不平はもつと飲めといふ、(9)讀書、ハイキング、(10)何れも無し、(11)宿醉、(12)昭和八年五月突然始めるそれより大分以前から俳句や川柳に關心をもつてゐながら作れなかつたし作りもしなかつたが生活の重壓が趣味に走らしめたのにちがひない。

各地柳壇

いのちあるる句を創れ

理整・樂艸・柳汀・郎路

川柳觀櫻大會

四月十二日　於道頓堀マルタマ階上

郊外の櫻はまだ蕾でも、此處マルタマの櫻は今を盛りと咲き誇つてゐる。

「イミテーションじやないか？」、などと眞實を探求する事は止しませう、それは科學者の研究範圍であつて、決して川柳家の云ふべき言葉ではないのだから。

川柳家は川柳家らしく、造花であらうと、なかろうと、たゞ其時々々を樂しみ得る人間でありたいと思ふのは私のみではありますまい、ましてあのホールの何處かに本當の吉野櫻が移植されてゐたとの事ではありませんか……さもあらばあれ、滿開の櫻あり、酒あり麗人のサービスあり、料理あり、舞臺では、マルタマ歌劇團の特別公演あり、人生のよろこび此處に盡くの感ありです。

さて閑話休題、此の日定刻一時近くより三々五々相續いで來る柳友先輩諸氏、數十名、直に席題、兼題の發表あり、或は豪華なるソファーに、或は滿開の花樹の幹に、それ〴〵句作に耽る事、二時間餘、夜の歡樂境も、しばし聲なく、たゞ句箋にペンを走らす音のみ完全にして贅澤なる句作道場が眞晝の道頓堀に現出した、締切後、西田艸樂氏の「吉原夜櫻實況」と題する講演あり、次で路郎師立ち「近頃の僕」と題して滋味あふるゝ近況報告あり、四時より披講に移り、終りて後、酒來り、料理來り、麗人來り、舞臺の幕は開かれて、耳に眼に口に、春宵一刻正に値千金の境地を滿喫して六時過ぎ散會した。

なほ例月の路郎盃は川村面沒子の得られるところとなつた。

都會人　記

参加者芳名（出席順）

汀柳、史呂、與三郎、南濃路、都會人、八歩、十九柳、孟浪子、澄風、義呂、萬樂、雄謙、英夫、鷄牛子、勝、夢裡、菊人、艸樂、面沒子、靜路、白蛇洞、耕花、路石、美知夫、たけを、おさむ、紀太、巨富、恒雄、文久、みつる、勇、多郎、路郎師、亂耽、禿山、努輪句、翠夢、雅司、默平、雨迷

席題　袖　　生田翠夢選

振袖に母の苦勞がひそんでる　美知夫

袖口を氣にしてウインク受けてゐる　多郎

振袖を着たも巣立ちも春四月　白蛇洞

たまに着た袖がきらいと女學生　默平

處女と云ふ派手な襦袢の袖が見え　ちづ子

無い袖はふれず二階へ寢て居れず　十九柳

叩かれて袖の重さを考へる　多郎

振袖を着せれば泣き止む女の子　いさむ

バスで立つ女の袖が氣にかゝり　みつる

紋付の袖お芽出たい墨を摺り　萬樂

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

ご冗談ばつかり袖で叩かれる　史呂
袖へ泣く妓に技巧あるのなり　同
隠し子を隠す袖でもあるまいに　南濃路
振袖も戀の技巧の道具なり　孟浪子
忙がしい事務と見えてる袖カーバ　禿山
袖にさわつて人絹だなと思ひ　巨雷
玩具部で父ちやんの袖放さない　同
舞の袖古典舞踊の會にみる　路石
後見の立場がつらい袖を引き　八歩
(佳)末つ子の手に持ち馴れた母の袖　萬樂
(同)振袖で僕の眼鏡を拭いて呉れ　菊人
(同)袖に手を入れて謀叛のある夜なり　文久
(同)恐縮の袖がふれてる銀狐　たけを
(同)賞めらて摂着の袖を振つて見せ　默平
(軸)袖合せ女つやつぼくあやまりぬ　翠夢

席題　近代人　住田亂耽選

修養の一つ近代人の宵寝　文久
カフェーに詩集忘れた近代人　菊人
打算的な戀に生きてるノーハット　たけを
感覚で生きてるだけの近代人　翠夢
スリルをば好み斷髪下駄をはき　同
洋服の月賦に近代人追はれ　艸樂
一杯のコーヒで戀を漁る氣か　たけを
薄給に甘んじてゐる近代人　巨雷
近代人時にまじないなど信じ　静路
新着のネクタイをよる彼と彼　美知夫
芦屋に住んで近代人の一人なる　みつる
失戀を近代人として恥ぢず　菊人
インチキが近代人に多過ぎる　萬樂

席題　男　山本雨迷選

素晴しい嘘を男はジッと聞く　菊人
縋られば男は弱きものなりき　みつる
ある時の男女へ媚びもする　都會人
男が好きと云ふ妓あなどれず　多郎
知つてゐるがだまされてやる男　英夫
押賣は男の居ない下駄と知る　萬樂
着流しの男の咽喉を聞きたがり　八歩
手枕で寝るは男の所作のうち　文久
男にはあき〳〵したと云ふ女　雄謙
男心亂れ〳〵て春の宵　路石
初孫は男と聞いてすて置けず　勝
花の下男の意地が弱いなり　八歩
(人)クリームと云ふを男が塗つてゐる　默平
(地)男性を況ふ話へ時雨れてる　たけを
(天)だらしない男にかわる櫻の灯　美知夫
(軸)男心果つるところに灯はつかん　雨迷

席題　漫才　森鷲牛子選

漫才はみんな夫婦でないと云ひ　静路
三面に目を通してる漫才師　萬樂
漫才の心の重き日もあらん　翠夢
漫才師人間並に風邪をひき　萬樂
アチャコが笑つても默つてるとも面白い　みつる
漫才に惜しい男を見付けたり　巨雷
漫才が乘換券をもらつてる　英夫
漫才師かけ持小屋へすべり込み　へき郎
漫才の顔は漫才の顔に出來　たけを
横文字の分るを漫才鼻にかけ　同
インテリと云ふ漫才のスリッパー　與三郎
漫才へ故郷の訛りもあつてよし　文久
漫才の元氣出るなりなぐるなり　同
漫才が無口に路次へ歸つて來　都會人

席　キャバレー　マルタマ　讀込　増位汀柳選

マルタマの宵三十の酒の味　八歩
マルタマでもう御氣嫌がなほつて來　雄謙
マルタマの椅子勝算は明日にある　與三郎
マルタマまで經濟論を云ひつゞけ　菊人
マルタマは思案に行くところでなし　雄謙
マルタマで遊ぶお金は別にあり　同
近代人先づマルタマのホールから　みつる
惚れられて歸るマルタマ午前二時　同
マルタマも見學をする團體旗　史呂
生き延びた氣持マルタマの椅子に寄り　夢裡
マルタマで年がひもなく惱ましい　澄風
マルタマ一昨日と違ふ友と來る　巨雷
ビジネスを丸玉でやる近代人　巨雷
春雨によしマルタマの櫻狩り　白蛇洞
マルタマへ來て胃の悪かつたのを忘れ　静路
うか〳〵とまたマルタマの客となり　たけを
マルタマの櫻ネオンの色になり　同
マルタマへいつぱし若い氣ではいり　艸樂
マルタマへ來て道ブラを落ちつかせ　八歩
舞臺ではダンスマルタマ宵のうち　與三郎
マルタマへほがらに戀の花が咲き　十九柳
マルタマへ一足先きに寄つてゐる　をさむ
マルタマのひとゝき命忘れたり　文久
マルタマをこよなく愛す琥珀色　同
マルタマの櫻嵐に驚ろかず　禿山
滿喫をしてマルタマの段梯子　萬樂
マルタマの二階商談まとめられ　同

(佳)マルタマに居るとは知らぬ留守を訪ひ　路郎
(同)世話人の顔マルタマに來てくれず　孟浪子
(同)マルタマの櫻へ戀の唄を吊り　十九柳
(同)マルタマへ昨日の通れざ別に來る　都會人
(同)有名な人とマルタマよく出逢ひ　雄謙

兼題　櫻　麻生路郎選

小供だけ置いて行き度い櫻　狩勝
夜櫻へ女の嘘は見事なり　菊人
櫻咲けどコーモリ傘を暗くさす　同
春だ櫻だ、櫻だ春だ、十八だ　勝
櫻の繪を見たゞけの妻の春　白蛇洞
夜櫻へ子の無い夫婦また出かけ　靜路
夜の櫻の影で泣いてた一と昔　ちづ子
隣から貸家の櫻眺められ　雄謙
石垣と櫻を大名殘しとき　澄風
咲けば散る櫻日本の姿なり　みつる
櫻咲きミス日本の忙しさ　巨雷
八重櫻散りそこなつて雨に逢ひ　多郎
櫻より女をほめる酒に醉ひ　たけを
櫻咲くまではと見舞悲しませ　八歩
滿開にかゝわりもなく佛樣　同
嫁どりも近く櫻も咲く話　亂耽
人格を忘れ櫻に醉はんとす　默平
八重櫻年增の情はこつちです　紀太
戀人の一人は欲しい櫻咲き　みつる
花の山辻占屋へも暮れかゝり　艸樂
ひとり散る櫻を人の折りたがり　禿山
櫻まだ當世間は慌てもの　萬樂
御返盃その盃に散る櫻　史呂

夕ざくら薄當ひらくところがなし　同
看護婦の口から洩れる花便り　萬樂
(人)櫻の灯老けた心をとりもどし　艸樂
(地)セロハンに包んだ櫻大事がり　面沒子
(天)エンプレスブリテンの着く櫻頃　同
(軸)櫻かねと落ついてゐる年になり　路郎

川柳雜誌社　**天王寺句會**　(大阪)

二月十六日夜　於葉光居　須崎豆秋報

席題　猫の戀　互選

坊ちやんの試驗へ邪魔な猫の戀　いさむ
大膽に家をあけてる猫の戀　せいち
猫の戀鈴を落して歸りけり　豆秋
この邊は貸家が多い猫の戀　德三

席題　當選　沐天選

當選へ表戸一杯開けさせる　榮壺
肅正に遠慮深く當選し　葉光
當選の盃醉へる色で搖れ　德三
當選をしたら働らく人ばかり　彩泡
當選に日の丸の旗拜まれる　汀柳
(軸)當選をして靜に寢てる候補者　沐天

席題　燒跡　南面子選

燒跡に冷めたい噂だけ殘り　せいち
空からのビラ燒跡へ一つ落ち　豆秋
燒跡に保險と別な春の草　葉光
燒跡の匂廻轉燒が賣れ　德三
燒跡にかなしやランドセル一つ　汀柳
(軸)スケッチ子燒跡の畫題見のがさず　南面子

兼題　手料理　豆秋選

手料理は足袋を片足脫いで乾し　榮壺
上阪の父手料理で良いと云ひ　いさむ
ラヂオで聽いた通りに夜の膳　銀浪
若妻の手料理本が擴げられ　南面子
愛の巢の手料理彼氏何か切り　沐天
食通に豆腐の味のむづかしさ　葉光
手料理がうまい〳〵とよろこばせ　禿山
(佳)手料理の亭主は酒の燗をする　彩泡
(同)手料理の玉子くづれたまゝで出る　德三
(同)手料理のまごゝろの味かみしめて　汀柳
(同)手料理へくだけた膝が揃ふたり　同
(軸)船頭の河豚は見てゐるうちに出來　豆秋

席題　借電話　德三選

取次と名刺に刷つた電話なり　榮壺
借電話肥えた女中が呼びに來る　いさむ
借電話まつ黑い手をちよつと拭き　豆秋
借電話はじめ子供を走らせる　せいち
借電話東京辯はよけれども　沐天
(佳)電話借る義理へ旅から土產物　彩泡
(同)借電話ながらもひけて目鼻つき　汀柳
(秀)借電話質屋と昔馴染なり　葉光
(軸)昂奮は對手がしてる借電話　德三

席題　宵寢　葉光選

泣かされて來ると宵寢をすゝめられ　せいち
おみくじの凶へ氣儘な宵寢する　いさむ
コダックも買へて宵寢の夢たのし　彩泡
宵寢すること恥にして無帽主義　德三
山の宿宵寢におしい月があり　南面子

寄からは寢たがきれいな星月夜　汀柳
(人)寄寢する息子を案じ起しに來　沐天
(地)別れてからは寄寢の癖がつき　同
(天)寄寢する覺悟を母に知らしとき　汀柳
(軸)寄寢するネオンの見へる中二階　葉光

席題　眉　汀柳選

眉太く次男柔道初段なり　いさむ
カフェーの女給になつたらしい眉　せいち
鏡臺に今寄の眉の引きどころ　沐天
老僧の眉にかゝつた香煙り　葉光
描き眉の道頓堀は十時頃　豆秋
三周忌何時の間にやら眉をおき　榮壺
長命の相だと眉をほめられる　彩泡
(佳)眉ほそく鏡花好みの人に似て　德三
(同)眉引いて餘生を想ふ紅をとき　葉光
(軸)洗濯をしらぬ女の眉ながし　汀柳

川柳雜誌社　**梅田支部句會**　(大阪)

二月十九日　於カナメ階上　川村觀月報

兼題　香水　鮎美選

春の海香水積んだ船がゆく　豆秋
香水がポケツにある待呆け　遊歩
香水と赤いパジヤマと春の夜　朝風
十六の春香水でだまされる　斗風
香水は夜の心にとけてくれ　九天
香水が壞れた朝のお孃樣　いわを
(人)叱られに行くに香水よく匂ひ　靜波
(地)打つまねをすると香水匂ふなり　豆秋
(天)香水が匂ふ二人は無口なり　かほる

席題　女湯　かほる選

長一郎の噂をしてる女湯　明鐘
お妾のきりやうが目立つ女風呂　不凡
晝の風呂お富のような女出る　觀月
女湯の子供同志はよく遊び　里十九
晝の風呂夜の女が匂はせる　不角
貫々へ女湯から笑つて來　與三郎
女湯は上つてからもひまがいり　艸樂
(人)女湯の新妻らしゆう上つて來　卜居
(地)女湯の使ひに困る店の者　里十九
(天)女湯の方に陽がある朝の風呂　德三

席題　銅像　夢裡選

花の春銅像すれたやうに立ち　不角
銅像へ日本人と言ふ自慢いわを　卜居
銅像を仰げば秋のちぎれ雲　里十九
銅像を立てる噂へ疑獄出る　都會人
銅像の下泣きに來た春の風　九天
銅像は默して世相の變りゆく　艸樂
銅像は穴蜂の目に見つけられ　豆秋
銅像のまへで挨りの足袋をぬぎ　觀月
銅像は言わず吾等を訓すなり　十九緒
銅像の肩にとまつた飛行ビラ　與三郎
銅像は街の續きへ建てられる　かほる
彦九郎未來永劫手を仕へ　史呂
(人)銅像の漢詩が讀めず子と歩るき　鮎美
(地)少年の希望銅像の下に立ち　史呂
(天)銅像へ直立でゐる紺絣　角嵐

席題　靜かなる朝　與三郎選

みづからをいましめ朝の蓮に立ち　卜居
喧嘩した今朝は靜かな二人です　大嶽
靜かなる朝靜かなる朝の膳　里十九
音もなく庵主朝の煙をあげ　艸樂
靜かなる朝を一輪咲いてゐる　不角
詰襟の靜かな朝へたばこ喫ふ　かほる
寫眞機が欲しい後樂園の朝　夢裡

(軸)寢間莫旅の朝なる靜心　與三郎

四國旅行

席題　數字讀みこみ　豆秋選

一と一謂ふだけ謂ふて鹹になり　卜居
一二三四五六七八九もとへ　里十九
貰ひ風呂三日月さまのかへり道　鮎美
十二とは思へぬことを子守言ひ　靜波
男の子歯痛へ二尺ざしを放り　かほる
五六歩を出ると谷町負けてくれ　德三
一切を神に委して金を貯め　與三郎
(人)末の子は一番ですと親はほめ　斗風
(地)腕ぐみのはゝんとおもふ四十過ぎ　鮎美
(天)三人の行くべき道が違ふなり　同

師題　合唱　艸樂選

合唱にけたのはづれた聲があり　斗風
合唱になつて舞臺に花が散る　不凡
コーラスがかすかに消へて幕が下り　都會人
朧夜をコーラスガールうがひする　角嵐
合唱のおとめの生毛ひかるなり　鮎美
(人)讃美歌の合唱ボブラ芽ふきたり　德三
(地)瞳はすんでゐる合唱の昂奮よ　鮎美
(天)クローバに風あり校歌よくそろひ　豆秋

川柳雜誌社
松山支部

浦島の夕べ（松山）

二月十九日夜　於耕一路居　大樓報

肅正選擧を明日に控へての十九日浦島ならねど明けて悔しき玉手箱、誰が榮冠を贏ち得るやら、それには關はりのない柳友の集ひ、名付けて浦島の夕べと。

兼題　浦島　互選

浦島へ竿珊瑚樹に引かゝり　五健
玉手箱爺に成つた手で蓋し　耕一路
浦島は珊瑚の中を拔けて行き　同
日本海浦島歸る日を晴れて　五健
浦島は眞赤な門に吸ひ込まれ　耕一路
生臭ひ膳に浦島困るなり　大觀
浦島へ萬事解消する煙　大樓
簡單に浦島太郎年をとり　靈子
失戀でなく浦島は歸つて來　同

兼題　一軒家　互選

一軒家こんな所に名灸師　五健
一軒家どちらの風もぶつかり　耕一路
一つ家の裏に表に梅の花　靈子
これからが野の道と成る一軒家　晴朗
一軒家荒れたる儘に梅が咲き　素泉
道問へば白髮夫婦の一軒家　靈子
一軒家自給自足のあれやこれ　大樓
斥候が道聞きに來る一軒家　五健

兼題　芽　互選

露持つた芽は今伸びる樣に見へ　耕一路
草の芽の一寸二寸氣は輕し　大樓
芽をむしりむしつて初夏の膳の味　靈子
草の芽へ木の芽へ春の唄が湧き　大樓
工場の畫へ木の芽の青の晴れ　五健
芽がふいて居る窓際に病み續け　素泉
やつと芽を出した畑へ下駄の跡　靈子

席題　日本畩　互選

日本畩テリヤを二匹連れて出る　靈子
先妻の娘日本畩地味にして　素泉
お隣に何事か有る日本畩晴朗
日本畩嫁と娘の別を見せ　同
日本畩日本と粹と淺ませ　五健

川柳雜誌社

畔柳社小集（大阪）

二月二十二日　於股ヶ池正本水客居

兼題　野心　九天選

醉ひつぶれ野心のあつたことにされ　水客
(佳)工事場の音へ野心を持ちなほし　某人
(人)ゴム靴に野心を捨てゝ生きる丈け　水客
(地)善人にもうけにならぬ野心あり　某人
(天)渉らぬまゝの野心へ厄が來る　久米雄

兼題　池　水客選

旅なれば名もなき池を背に寫し　某人
釣れそうな靑さ釣るべからずの池　同
影二つ池に心を見すかされる　九天

猿澤池

池の鯉春酣の塵に馴れ　天秋
池池の姿で春の宵の色　久米雄
(地)思案する場所を見つけに池へ來る　同
(天)由緒ある池龜一匹をみつめられ　秀太
(軸)もの思ふ心に池の藻が動き　水客

席題　總選擧　某人選

總選擧南の國は梅が咲き　水客
文盲に書狀が入る總選擧　秀太
一票の權利へ義務へ空が晴れ　水客
總選擧それより麥が氣にかゝり　天秋
(人)一票の力國旗へ日は晴れる　一蜂
(地)ポスターは破れ選擧に負けてゐる　九天
(天)失業へ選擧肅正ビラばかり　天秋
(軸)春淺く選擧の公報火へかざし　某人

席題　鯛　一蜂選

鯛の骨塗鯛へ灯が映るなり　某人
貧しさの中へ小鯛を買ふ話　久米雄
鯛でんぶまだ父も母も居て呉れる　水客
魚ぢまか鯛かとちよこの受け具合　秀太
(人)好い鯛だほめて鰹を買ふて去に　天秋
(地)十二月小鯛をむごくひんまげる　某人
(天)鯛一尾長屋の井戸を賑はせ　水客
(軸)神前に鯛一尾の式を擧げ　一蜂

席題　押賣　久米雄選

いやらしい押賣だわと妻かくれ　天秋
錢のない日を押賣りに親しまれ　水客
押賣の哀れな下駄を穿いて居り　同
押賣の去んだ後から錠をかけ　同
押賣の舌打ちをして去ぬ粉雪　某人
(佳)押賣に家のどさくさのぞかれる　一蜂
(人)押賣りへ夫キングを伏せて立ち　某人

(地)押賣りの素直に歸る背が　細い　同
(天)押賣りに故郷の訛りをつけこれ　九天
(軸)押賣が女心をたじろかせ　久米雄

席題　共鳴　秀太選

共鳴のそれからくゞる繩のれん　九天
共鳴を得て壇上は水をのみ　水客
(人)藥湯に二人民政びゐきなり　某人
(地)甘黨に共鳴をした夜が寒し　九天
(天)共鳴を大臣眼鏡ふいた丈け　水客

席題　地震　天秋選

人心をみんなさらつて地がゆれる　久米雄
東京の地震に遇つたを自慢にし　水客
無事明けて地震の明日を睡たがり　某人
(人)正直に慌てゝそれでいゝ地震　同
(地)地震計これしきのことにけし飛びぬ　水客
(天)當地には地震これ有りぬくい春　某人
(軸)すわ地震乞食慌てるものがなし　天秋

川柳雜誌社
簸川支部

高松句會（島根）

二月廿三日　於後藤大朗居

當夜は春雪淡く夕べより降りつのりたる寒さ身に泌み田舍の泥濘申分なく足のふみばもない有樣でも熱ある……諸柳人のつどひ和やかな春のメロデー演ず深夜迄種々重要決議等をし、解散致しました。

席題　手拭　松濤選

口笛は手拭肩に宿の朝　朴泉
頬冠りの汗はにほへる野をかへる　綠之助
この手拭の色が百姓のいろです　同
(佳)朝の風呂タオルしゃかな泡を生み　同

席題　流行妓　朴泉選

流行妓四十五分の花を賣り　好郎
流行妓の瞳にもう春の風春の風　大朗
よく饒舌りそしてよく呑む流行妓　綠之助
流行妓乘せた車の威勢よし　松濤
流行妓も今日は地味なり宮詣　雷門
流行妓の頬へ疲をはだぐばけ　大朗
流行妓は煙草ふかしてばかりゐる　朴泉

席題　總選舉前後　綠之助選

立候補こんな男にも頼み　好郎
蕭選の宵はさみしきネオン街　朴泉
落選へさすが總裁うなつたつけ　同
(軸)活字大きく「總裁落選す」　綠之助

兼題　會計　好郎選

會計に春といふ日のない愁　大朗
無口でお坊ちやんへ會計まかしとき　同
會計をコツ〳〵笑はぬ男です　綠之助

兼題　花　大朗選

青春を殺した椿呪はしく　松濤
(佳)沈丁花の窓なりほのかなこひごゝろ　綠之助
K君
(同)良き父となつて今年の梅の花　好郎
(同)花だより無精髭など剃つてくる　朴泉
(人)花束を持ち青春を追ふ日です　綠之助
(地)造花ヒシャンデリヤ唇盜む春の風　朴泉
(天)果なき宿命花骨牌をめくるよ　綠之助

阪大川柳會例會（大阪）

二月二十五日　丸島利生報

兼題　仲裁　路郎選

押し切つてさて仲裁の來るを待ち　芳一
マー聞いておくれやすと夫こき下し　同
仲裁は自分のことも例にひき　柳秀
切れ話女將見兼ねた口を添へ　同
仲裁は六法全書も讀んで來る　たけを
あてられる話仲裁きかされて　同
割り込んで仲裁金にする氣なり　方正
仲裁は人にも知れぬ金つかひ　淺女
仲裁を斷られたので癪にさへ　同
一つ二つは仲裁なぐられる　路生
俺にまかしなと親分とりあはず　同
仲裁を豫期して虛勢張つてゐる　利生
(人)無條件といふ仲裁の苦しけれ　芳一
(地)仲裁へもう任せてる怒りやう　千秋
(天)見さかひもなく仲裁にたてもつき　路生

兼題　見物　路郎選

見物の一人の顏に雨が落ち　栞
見物の同なじ橋を又渡り　同
見物の中からさくら召し出され　洗塵
大阪の物見高いに母あきれ　淺女
さて賣らんとすれば見物の輪がくずれ　利生
懷手したまゝ見物押し出され　たけを
見物の疲れどつこいしよと座り　柳秀
(人)子を前に出して貰うた紙芝居　同
(地)よう買はんのかと見物にらまれる　路生
(天)災難を見に行く人の下駄が割れ　方正

雜吟　路郎選

赤心の一票落選とはなりぬ　たけを
八字髭海驢に似たりおどけてゐ　方正
ノーハットまだ獨身といふ姿　利生
ばれる嘘女平氣で言つてのけ　同

二月二十一日地震風景

あわてやう搖れやんでから笑ひ合ひ　同
子の寢顏暮しを知らぬ顏でよし　栞
ガンヂーに似てガラ〳〵蛇の眼鏡越し　同
氷割る音へ退院身を縮め　千秋
ヨイと卷け明日といふ日を知つてるか　同
家政婦に似てカンガール忙しく　路生
(人)整ひすぎてゐて尼僧といふ姿　栞
(地)メランコリックな狐の顏は淋しいぞ　路生
(天)そんな事でもさして置かねばさいふ存在　方正

席題　淡雪　路郎選

駈落へ舞臺は雪をちらつかせ　柳秀
戀よ戀淡雪に似た戀よ戀　路生
歸りにはもう消えてゐる春の雪　青一路
淡雪の中を借傘寄り添ふて　利生
雪淡にほろりとなるも女氣の　同
遲刻の理由にもならぬ春の雪　方正
淡雪をぼんやり見てる十八九　同
宿がへの車につもつた春の雪　たけを
飲める身のケチな雪とは思へども　栞
葉卷などくはへて見てる春の雪　同
(人)淡雪に似た人生をあくせくし　柳秀
(地)淡雪へ誰を待つのか告知板　たけを
(天)淡雪へ夜なきうどんの荷拵へ　栞

(軸)ノックした人に淡雪敎へられ　路郎
(同)あは雪に頰をうたれて待ちぼけさ　同
(同)金があればうれしき春の雪なるに　同

川柳雜誌社　**今治句會**（愛媛）

二月廿六日　於伊豫貯今治支店　月原宵明報

史呂さん今頃どんな顏してるだらうか和やかな句會

兼題　洋服　心府選

洋服へ一輪つける花の山　宵明
洋服で來て就職を祝はれる　同
洋服で來た會葬の急ぐなり　曉童
洋服の膝を攝へて金を借り　小樓
(軸)洋服は勤誘員と見てとられ　心府

兼題　澤庵　曉童選

デパートへ澤庵を買ふ用があり　宵明
澤庵の漬り加減へ皆元氣　心府
澤庵の辨當へ空氣澄んでゐる　同
澤庵をいつもの型に母は切り　曉童

兼題　手提げ　宵明選

ハンドバック男のものも入れてあり　曉童
手提かと見れば藝者の撥を出し　心府
手提から土産に混つて珠數が出る　葉光
(佳)祖母の手提げのいそがしい春　同
(同)青春をハンドバックへみんな入れ　曉童
(同)手提げから少々嘘も出す女　宵明

兼題　出帆　鶴聲選

出帆へ見送りのない夏帽子　曉童
蕎乍ら送る瞳のあり銅羅の音　心府
出帆へ自動車で來る女連れ　曉童
出帆へ姉や妹は泣かしに來　宵明
(軸)出帆へ母の涙が先に出る　鶴童

席題　責任、釦　互選

朝の不滿へ釦が落ちる　宵明
責任は左の耳が鳴つてくる　曉童
責任のないのは四時に引揚げる　同
金釦一年生の顏のつや　心府
言譯は釦を一つもてあそび　同
責任は結局自腹きらされる　同
責任へ夜の時計が一つ鳴り　同

席題　四海波　互選

四海波靜かな影の金屏風　心府
四海波古へからのまぶしさや　宵明
トランクの支度は出來た四海波　曉童
四海波上眼使へば顏が見え　同
四海波煙草を消して座り替え　同
四海波しばし時計の音となり　同
四濱波村長さんが謠ふなり　宵明

川柳雜誌社　**神戸部友句會**（神戸）

二月二十九日　於西村明珠居

兼題　影

教官に生徒の影はふまれたり　幸捐
親分の影で大きな口をきき　明珠
小川まで延びた影あり桃の花　華水

席題　封筒

封筒の最後の一字力んでゐ　竹楓
繪封筒抱いてた樣な皺があり　吉左右
表現もあり封筒の字がかすれ　華水

席題　出席

出席簿病氣の子供二度呼ばれ　華水
一番に出席をして額を讀み　明珠
末席に異議のありそな顏二つ　竹楓

川柳雜誌社　**竹原句會**（廣島）

三月十日　於町田承春居　承春報

兼題　呼鈴　速射砲選

眞夜半のベルへ女中の眠い聲　芳泉
呼鈴を二三度押して戸を叩き　仙水
(佳)呼鈴の音御氣嫌のうかがわれ　承春
(同)呼鈴へせわしくはたくコンパクト　同
(同)呼鈴へむつつりと出る玄關子　可笑
(同)もう一度ベルを鳴らして思ひ切り　芳泉
(人)はじかれた樣に給仕はベルへ立ち　可笑
(地)物賣ひ呼鈴だけは觸ずに居　一厘
(天)日曜の事務所へベルの廣く鳴り　可笑

兼題　梯子　可笑選

梯子から梯子へ渡る猿の業　碧園
いらぬ日の梯子の長さ邪魔になり　芳泉
(佳)段梯子男の音で上るなり　同
(同)梯子酒財布の底をはたかせる　承春
(同)落ちそうな熟柿へ梯子借りて來る　速射砲
(同)もう少し梯子が足りぬ雀の巣　同
(軸)てれ臭く上る廊の段梯子　可笑

兼題　飯臺　承春選

勢揃して飯臺の賑やかさ　碧園
里歸へり飯臺までも賑へり　仙水
飯臺が机にもなる暮し向き　一厘
飯臺へ大臣になると云ふ子もて樂し　速射砲
うらぶれの身を飯臺へせまく坐し　同
飯臺が無茶によごれた子澤山　可笑
飯臺へパヽがマヽがと樂しそう　同
(佳)飯臺は樂しくパヽを待つて居る　同
(同)飯臺へ膝をくずして燗を待ち　速射砲
(同)食卓へせめて花など生けませう　可笑
(軸)飯臺へ數なき皿が並べられ　承春

席題　二人連れ　一厘選

溫泉の町へ噂殘した二人連　芳泉
二人連並んだ寫眞土產にし　碧園
何か譯ありそうな同行二人なり　芳泉
寄せ書へ二人の旅の恙がなし　速射砲
(軸)兄妹を知らぬとこでは怪しく見　一厘

席題　米　碧園選

米を焚く術も知らずに娘は婚期　一厘
年賀米納め今年も吐息する　芳泉
ビタミンの價値へ玄米飯が焚け　速射砲
米櫃がよく知つて居る僕の內　芳泉
(人)ザク〳〵と米磨ぐ手付世帶めき　承春
(地)米作を氣にして今日の嵐へ出　可笑
(天)足らず米買ふて小作の子澤山　速射砲

席題　草　芳泉選

草崩よ踏めば水吹く棄草鞋　速射砲
草餅が出來たと孫を抱きに來る　承春
草原を風景にする都會人　一厘
屋根草が茂りて元祿からの家　速射砲
草笛を吹いてみのりの唄に和し　同
(佳)草に寢て或る日の自己を振り返り　可笑
(軸)體驗と共に藥草勸められ　芳泉

川柳雜誌社　**今治句會**（愛媛）

在間小樓君
平井藤生君送別句會

三月四日　於貯蓄銀行支店　宵明報

席題　別れ　小樓選

君さらば狹い世間を廣く住め　紫石
別れゆく者の姿に吹雪する　抹生
襟脚へ別れ話が持ち出せず　宵明
小樓君へ
その夢をそつと預けて別れゆく　同
お別れだせめてトランク提げませう　心府
牡丹雪別れ話に更けてゆく　曉童
(佳)君送る心淋しい明日の春　鶴聲
(同)涙して見入る疊もおれの夜　紫石
(同)同じ陽の下だ笑つて別れよう　文庫
(同)惜別の斷ち切れ難く砂に描く　宵明
(軸)花待たず別れゆく日の雪もよい　小樓

席題　便り　抹生選

旅先の便りスタンプ押しそへて　枯佛
無事と云ふ便りがあつて家知れず　鶴聲
家出した今日安心の便り出し　憲一
甲板で便り誓ふた君の顏　宵明

久しぶり姓の變つた友の文　心府
合檢の便り故郷の春に住み　紫石
(佳)病室の泣ける便りへ灯が消され　同

兼題　灸　文庫選

灸點をやたらに据えて不倖　宵明
虫の灸愛の力は押へつけ　同
脚の灸自分ですえてゐる孤獨　心府
健康な軀へうすく灸のあと　枯佛
灸すえる祖母の眼鏡が鼻にあり　小樓

兼題　遺言　曉童選

もう外に云はなかったかと伯父が來る　宵明
遺言へ連子であつたのに氣付き　抹生
遺言へまゝ母側の人ばかり　宵明
遺言を聞く制服の膝頭　心府
遺言の土地を守つて二十年　小樓
遺言に一人の兄のあるを知る　宵明
遺言へ慾な男が座つてる　心府
(軸)遺言の通りに添ふたのが悲劇　曉童

兼題　鰯　宵明選

一山の鰯夕げの顏がより　紫石
鰯屋を値切り世帶も板につき　心府
鰯焼く煙むつきへ伸びてゆく　曉童
さむ空へ鰯一山賣れ殘り　一風
(佳)背の子が泣いて鰯の火が燃える　心府
(同)賣れ殘る鰯へひるのドンが鳴る　一風
(軸)鰯やく匂ひは僕の歸るとこ　宵明

席題　藥局　松石選

藥局に待たされ足の先が冷え　心府
藥局へしみ〴〵話す生活苦　文庫
毒藥の棚へひつそり鍵が下り　紫石

雜誌社　川柳　**簸川支部合同句會**(島根)

三月十五日　於高松絲之助居

大地高松兩支部は當然簸川川柳地盤に同じ呼吸をしてゐた、今日より强き地盤をより固くする爲め新らしき力の簸川支部を固めます。

生きた社會を知る時に、人世また何物たるかを知る時に我等は簸川の結合によつて眞の川柳人の完成であると確信してゐます。

此の意義ある合同記念句會を開催する。

(好郎報)

兼題　意氣　絲之助選

その意氣をしかと賴んで筆を止め　章泉
此の意氣で勝つて來ますと力瘤　朴泉
意氣は高く〳〵青空とわたし　さわだ
(五)再生の意氣悲壯なり老ひし父　朴泉
(同)はるは健康と意氣を惠めり　同
(同)青春を奏でる意氣のひとみです　凡愚
(同)怒濤の意氣へしはげ自省のかけもなく　好郎
(同)意氣はあほざめた顏にしてしまい　太郎
(人)戀人の意氣へ女の瞳はもえてゐた　凡愚
(地)忍從の底に燃えてる意氣でした　松濤
(天)起重機へ此の意氣がろくあなどられ　好郎

席題　第二の戀　松濤選

古傷が痛む第二の戀となる　絲之助
(人)第二の戀故に甦つた青春で　傳重
(地)おゆるし下さい僕は戀の前科者　絲之助
(天)カーテンも眞赤に染める第二の戀に住み　好郎

席題　評判　朴泉選

悪評判知りつゝ浮世のふところ手　凡愚
評判はいつしか消へて死んでゐた　同
默々と評判聞いて一人せき　松濤
評判を笑つて女の煙草の輪　さわだ
小金が出來たもう評判だ　絲之助
(人)はやり妓いつしか消へた評判ぞ　凡愚
(地)評判の女給すました顏で居り　海棠
(天)評判のまんまきちんと夫婦なり　好郎
(軸)評判の美妓僕へいやに無口すぎ　朴泉

席題　戰法　さわだ選

戰術は見事客足つゞくなり　海棠
卑怯だが自性をころすすべもあり　好郎
戰術の一手ものすごき逆モーション　同
無力はかなし戰法は變へたけど　絲之助
(人)戰法も知らず呑んでる敗殘者　松濤
(地)世に生きる妻とふたりの戰法よ　朴泉
(天)廣告球大空高く浮れをり　凡愚

雜誌社　川柳　**道頓堀句會**(大阪)

三月十七日於カナメ喫茶店　青木史呂報

席題　連れ子　里十九選

成績を連れ子の方が褒められる　史呂
年かさの連れ子が後でする燒香　榮壺
(佳)馴染まない連れ子へボン〳〵時計鳴り　流の介
(同)連れ子して朝の姿もつゝましい　縷紅
(同)晩酌が濟む迄連れ子坐つて居　豆秋

(軸)御近所は連れ子の方へ肩をもち　里十九

席題　陽氣　縷紅選

羽織脱げば櫻が落ちる汽車の中　榮壺
獨り居の陽氣は家に落付けず　史呂
その上に洋樂もある總踊り　里十九
陽はうらゝ障子に蠅が一つゐる　豆秋
(佳)幹事ひとり陽氣な中で草疲れる　流の介
(同)春の陽氣はわたしのこゝろを知らない　史呂

席題　未練　豆秋選

一ぺんはひつつけて見る破れ茶碗　里十九
擲たれても矢張り未練はあるのなり　史呂
(佳)青い灯へ未練な男立ち止まり　縷紅
舊戀
(同)ぽつたりと落ちた薔薇は赤かつた　十九柳
(同)未練ありて小石を海へ投げてくる　流の介
(軸)未練ではないがと涙まで流し　豆秋

兼題　閑人　汀柳選

閑人の煙草は煙もゆるうたち　十九柳
(佳)デパートの隅に閑人らしくゐる　流の介
(同)閑人は今日も同じ香具師へたち　里十九
(同)閑人の雨が降らうが出掛けたり　豆秋
(同)閑人へ千日前の陽がたかい　史呂
(同)閑人の爪は綺麗に剪つてあり　同
(同)閑人の硯洗ふて書く便り　榮壺
(同)閑人の家主紙鶴折つてくれ　同
(軸)閑人の今度は圍碁に凝りはじめ　汀柳

川柳雜誌社 **梅田支部廻覽誌**（大阪）

第二回　藥　川村觀月報

まけぬ氣の強い男も藥びん　白菊
にんげんを嘲笑つてゐるカルモチン　觀月
あれこれと藥に迷ひ病みつゞけ　靜波
出戻つてさびしき藥ばかりのみ　鮎美

第三回　海の人々　清記互選

船唄の影帆に眠る子の寢顔　秀峯
帆を卷けば只海原へ星一つ　翠陽
朝もやへ釜がふいてる舟世帶　美津生
八十にちかく濱邊に網をすき　觀月
霧の朝船頭なにかどなつてゐ　遊歩
荷揚舟妻夕飯の米をとぎ　靜波
思ひ出の老船長に世界地圖　鮎美

「つどひ」第三十回

吉田水車報

功成て故郷の家のひくすぎる　夕鐘
成功へ出迎への父無口なり　同
成功の無口であつたことが知れ　水車
成功へ惜しや人間置き忘れ　同

鮎美さんが二年ぶりにしかもだし抜けに來てくれたのも愉快であつた。實を言ふと二人共忙しい軀なので、廣小路際の偕樂亭で淺酌にお互の健康を祝し一と時を柳談に過し得たのはこゝへ來て以來のうれしいことであつた春とは名ばかりいてついたアスファルトを蹴り乍らなつかしい大阪のことどもを語り合ひ多幸を祈つて惜くも袂を別つた。

二月二十四日　於偕樂亭　水車報

席題　久しぶり

久しぶり眼鏡の君とおもしろし　鮎美
青空へ一歩一歩の久しぶり　同
久しぶり窓をあけてる二人連　同
まごころの寄繰に酒をながし　同
久しぶり友の訃も出來てよし　水車
只握手何から言はう久しぶり　同
月並な挨拶ぬきに飲むばかり　同
だし抜けに二年目の顔眺め合ひ　同

川柳指導講座

講師　塚越正光氏

課題「夢」一人一句

締切　五月末日
發表誌　八月號
投句　本社宛

川柳誌上相談

擔當　福田山雨樓氏
同　西田蚺樂氏

川柳に關する相談であれば何んでもよろしい。直接の返信はいたしません。隨時締切る。本社宛。

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧手一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

【東京】▲大谷五花村氏（本社客員）は四月五日野田醬油會社の招待をうけ東京の漫畫團と川柳團十五六名と共に野田町に行かれた。▲求眞會四月例會は十二日熱海溫泉へ不倒人、右近、○丸、雀郎、太郎丸、五花村氏等の錚々たる顏振れであつた。▲高須啞三味氏（本誌東京から執筆者）は赤ちやんを儲けられたが肥立よろしからず四月三日に失くされました。▲淺田一氏（本社賛助員）は昨年末より病臥されてゐたが全く健康を恢復されました。

【北海道】▲函館川柳社創立二十周年記念大會は五月十日午後五時より東川町事務所樓上で開催される。

【石川】▲益明川柳社（能美郡寺井町）では三週年紀念會を省線驛前根上川柳社と合同し四月十八日午後一時より同町「梅月庵」で縣下縣下川柳大會を開催し、金澤より本社客員安川久流美氏其他多數出席された。

【兵庫】▲西村明珠君（本社同人）は四月十九日會社の方々と比叡山より坂本京都へ巡遊された。▲枝松規堂君（視野）は四月十九日吉野山へ。

【奈良】▲田中美津女さん（一宮市）は奈良縣高田町南口田中別莊内へ轉居。

【島根】▲入澤笑鬼君（支部同人）は滯京中けし粒川柳會に出席し島根柳人のため氣を吐いた。▲松江支部四月例會は四月十日湖畔みどり喫茶園にて盛況裡に開催した。▲勝谷山川兒君（支部同人）は松江市役所伸々會娯樂部長に當選、山根梟人君は會誌編輯部員に就任さる。▲四月三日惠美須さんを祀る關の五本松で名高き美保神社へ松江支部長柳人君を初め、祥月、蕚路、順風、淞南、庄介、華雪の諸君打連れて參拜。▲山本靜二君は四月五日印刷業を開店、發展を祈る。▲梶谷巷二君（本社松江支部同人）は三月九日來阪された。

【愛媛】▲原田一風君（本社今治支部同人）は大阪市港區九條北通三丁目阿曾喜四郎方へ寄寓されると。▲長野文庫君（本社今治支部同人）は四月二十八月來阪本社事務所にて汀柳編輯長と懇談された。

【神奈川】▲村上餘念坊氏を圍みての會は四月十一日横濱野毛おでんやにて催された。

【廣島】▲本社竹原支部では四月二十五日的場公園三鬼神社境内に於て觀櫻句會を催された。

【滿洲】▲首藤竹楓（本社同人）は奉天市藤浪町六〇番地折田方へ轉居さる。▲岩崎柳路君（本社同人）は張家口に支店を設置された、尙今秋、松代夫人が歸省されるとの通知があつた。

【朝鮮】▲石井健城君（仁川）は京城府外新堂里櫻ヶ丘白井方へ轉居。

【臺灣】▲宮内耕朗君（本社臺中支部）幹事は臺灣に於ける川柳普及運動に着手されてゐる。

【大阪】▲麻生路郎師（本社主幹）は嘉寶商事株式會社を辭され專心川柳雜誌に全力を致される事とな

つた。尙「明るい家庭」四月號に川柳小解ビルの机でを連載されてゐる。▲橋本綠雨君（本社總務）は美奈子夫人同伴で鄕里石川より父君を案内されて江の島、鬼怒川温泉、日光、東京、善光寺等を巡遊され、東京では五日夜芥子粒句會へ出席された。▲增位汀柳君（本社編輯長）は「明るい家庭」四月號に「卓球の話」を執筆された。尙五月下旬に大阪佐野屋橋筋文樂座南入東側で純喫茶川柳を開店される。▲西田紳樂君（本社同人）は四月二十二日東上、山雨樓支社長、正光氏と逢はれ、夜三太郎氏宅を訪問された。▲小川武壽伯（本社客員）は四月十四日大阪から二時間の海上ハイキングで詩の國淡路へ遊ぶとの便りを頂く。▲廣原都會人君（本社同人）は當分の間、尼崎市昭和通五丁目茂茂の莊に居住さる。▲市場沒食子君（本社同人）は三月十四日長男を擧げられ母子とも御健全をお嬉び申上る。▲原史風君（本社同人）の電話局名番號は次の通り改定された堀川四〇六〇番。▲加藤靜兒壽伯（當時代の同人）は四月六日より八日迄大阪有恒倶樂部で同氏近作洋壽展覽會を開催された。▲平井春光君（本社同人）は四月二十一日會社の運動會で洲本へ「うらゝかさお城の窓へあごをのせ」。藥業往來の藥と川柳欄へ合はぬ藥と合ふ藥を執筆。▲南北、水府兩氏の川柳壽展覽會は四月十二日より十七日迄心齋橋そごう五階壽廊で催されて好評であつた。▲平井十三郎、青木史呂兩君（本社同人）二十三日寶塚へ麗人四名と共に遊ぶ。「見識の高い女と寶塚」。▲奥野禿山君（本社同人）は其奥と改號された。▲平井與三郎（本社同人）麻雀新聞發刊す御希望の方は申込下さい二錢切手封入の上、ちなみに轉居先大阪市港區東田中町二丁目吉川みよ方。▲第七回大阪朝報句會は四月二十七日夜カナメ階上にて催され、汀柳選「茶柱」の高點を得た平井春光君が朝報賞を獲得された。▲谷口寒草君は大阪市住吉區天王寺町二六二六へ轉居▲北川あや美君）元御旅支部同人）は三月十八日羽衣別居にて長逝されました哀悼の意を表します。

編輯の窓

路生郎

▼讀んだり書いたり句作に耽つたりするのに、セル一枚で寢轉んでゐられるシーズンになつた。

▼三月號遲刊、恐縮。四月號で少しく取戻したこの分なら五月號はうまく行くだらうと思つてゐたら、更に遲刊で申譯がない。果てしなき編輯に對して擔當者汀柳君の内的支障だから、どうにも仕方がない。六月號、七月號でスツカリ取り戻したいので、目下その工作中である。今暫くおゆるしが願ひたい。

▼目下特別議會開會中であるし、何か書きたいと思つてゐたが、暇がなかつた。相變らずソレ疑獄だ。ソレ校長の椅子賣りだ、大本教本部の取りこぼちだと世は騷がしい。こんな時に靜に作句に精進してゐられる諸君は幸福だ。

▼石崎柳石君が「川柳と松浦靜山侯」を書いてくれた。御愛讀を乞ふ。

▼原稿はかなり澤山あつまるが、ユーモアならウンとユーモア、何んでもいゝから素晴らしいものが欲しい。

▼本號で新刊紹介やその他書きたいことが澤山あつたがそれも果せなかつた。すべては次號でうめ合はせよう。

川柳雑誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手ハ用ヒズ）、巻頭、柳書廣告、その他改號

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します。

軸箱入　貳拾圓・額　拾圓
小物五圓・短冊參圓

御申込は前金で本社事務所へ

句會案内

本社句會案内御希望の方は左記へ御申越下されば、其の都度お知らせ申上ます。

西成區鶴見橋通五ノ四
會報係　青木史呂

合本特賣

川柳雑誌の合本第二巻より第十巻まで。

各一巻　金壹圓五拾錢
第十一巻及第十二巻　金參圓
送料大阪市内　一冊六錢
市外　一冊廿四錢

御申込は前金で本社事務所へ

投句用箋

川柳雑誌投句用箋の昭和十一年度新製が出來ました。投句には本社正規の此用箋を御使用下さい。

五十枚綴　二冊　金拾貳錢（送料共）

御申込は本社事務所へ
＝切手代用も可＝

残本分讓

川柳雑誌の残本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます。

第二巻より第三巻迄　一冊　十五錢
第四巻より第十一巻迄　一冊　十錢
第十二巻　一冊　二十錢（送料一冊一錢）

御申込は前金で本社事務所へ

懸賞川柳

五月十日
課題「籤びき」「髭」　六月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）
賞品は秀逸數句に薄謝を呈す
選者　麻生路郎氏
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方　化粧新聞社柳壇へ

朝報柳壇

雑吟を募る　用紙ハガキ
川柳家の雑筆を歡迎する
選者　増位汀柳氏
宛先　大阪市天王寺區上汐町一丁目増位汀柳氏方　大阪朝報社柳壇へ

川柳家名鑑

全國川柳家名鑑の作成に取掛つてゐます。左の通り御記載の上ハガキにて御報らせ下さる樣お願ひ申上ます。

姓名・雅號・生年月日・現住所・職業・簡單な柳歴
宛先　本社事務所内
係　増位汀柳へ

改號

このたび左の通り改號いたしましたどうぞよろしくお願ひ申上ます

不屈洞　奥野其奥（キオウ）
発山改メ

大夕柳壇

雑吟を募る　用紙ハガキ
選者　増位汀柳氏
宛先　本社事務所内　大阪夕刊新聞社柳壇へ

川柳倶楽部

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌

毎日一回發行
一部廿錢・送料一錢

東京市牛込區拂方町一四
川柳倶楽部社

川柳研究

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません

見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ
東京市王子區上十條町八五〇
發行所　川柳研究社

一冊金廿錢
半年金一圓
一年金二圓

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八（取次所）川柳きやり吟社
川柳雑誌社事務所
川上三太郎主宰（毎月一回發行）

川柳雜誌社關係の人々（順ろいい）

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　國枝史郎　松本研三　藤村作　藤本卯之助　赤井退蔵　淺田清一司

客員

末弘嚴太郎　伊藤彦造　山一歩　鳥海明　大谷五花村　大西長三郎　岡田三面子　小川武　亀井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　窪田銀波楼　安川久流美　前田雀　前田五健郎

同人

食満南北　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　小林不浪人　森東魚　岩崎柳路　石曾根民郎　市場沒食子　石崎柳石　原史風　長谷川三汀　西村明珠　西山月を　新見世間晋　奥野其奥　大鶴八歩　大西由　岡田吉水　吉田水車　吉川唖人　立井登美坊　竹内機見女　中西おさむ　中澤濁水　村松夢裡　熊谷紅　日野華水　姫田夕鐘　平井與三郎　平井春光　水谷鮎美　宮岡白峰　喜多春秋　北山悟郎　遊舟　岡田茉人　田水車　川唖人　内機見女　澤濁水　松夢裡　谷紅　野華水　田夕鐘　井與三郎　井春光　谷鮎美　岡白峰　多春秋　山悟郎　舟　眞田幸捐　青木史呂　明石柳次　形一杉　阿江戸みつる　後藤青兒　近藤勇　朝田新水　福田鶴峰　松下小柳子

編輯局（同人）

北山悟郎　生田翠夢　喜多春秋　春元紀太　宮岡白峰　高橋かほる　水谷鮎美　永田里十九　平井蒼太　山本丹路　平井春光　庄萬よし　首藤竹楓　須崎豆秋　主幹　麻生路郎　關本雅幽　妹尾變人　支社長　福田山雨樓　毛利九波　麻生葭乃　廣原都會人　廣田六浦　東谷聞路　山本雨迷　増位汀柳　住田亂耽

道頓堀支部（大阪市）幹事　青木史呂
九三會支部（大阪市）幹事　北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事　喜多春秋
函館支部（函館市）幹事　亀井晟修
高知支部（高知市）幹事　國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事　水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事　硲流之介
田邊支部（和歌山）幹事　辻左馬
簸川支部（島根縣）幹事　尾綠之助
京都支部（京都市）幹事　明石柳次
鳥取支部（鳥取市）幹事　中島鐵州
松山支部（松山市）幹事　酒井大樓
御旅支部（大阪市）幹事　江戸みつる
天王寺支部（大阪市）幹事　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）幹事　西いわを
松江支部（松江市）幹事　奈良井柳人
塗青支部（大阪市）幹事　熊谷紅
大鐵局支部（大阪市）幹事　植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事　增位勇多子
今里支部（大阪市）幹事　市場沒食子
上町支部（大阪市）幹事　廣原都會人
今治支部（今治市）幹事　月原宵明
光笑會（大阪市）幹事　永田里十九
伯耆支部（鳥取縣）幹事　三鴨美笑
竹原支部（廣島縣）幹事　町田承春
市岡支部（大阪市）幹事　平井春光
十三支部（大阪市）幹事　淺野牧人
臺中支部（臺灣）幹事　宮内耕朗
兵庫支部（神戸市）幹事　濱田久米雄

投稿規定

▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は同人に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

募集

第十三卷第七號課題

五月五日締切

（各題十句以內）

▼湯上り　高橋　かほる選

▼金魚　西村　明珠選

第十三卷第八號課題

六月五日締切

（各題十句以內）

▼喫茶店　增位　汀柳選

▼友だち　喜多　春秋選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも預ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十一年四月廿五日印刷
昭和十一年五月一日發行

第十三卷　第五號
（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地
電話天下茶屋二五七九番
事務所　川柳雜誌社
電話南六四四番
振替大阪七五〇五〇番
支社　東京市蒲田區女塚町一三七
川柳雜誌東京支社

有保證新聞紙法刊行
禁無斷轉載

賣捌書店
（大阪）大賣捌大賣書店—明文堂其他市內各書店—（東京）東京堂（巖松堂）吉岡書店玉森堂紀伊國屋三味堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

安産のために
ワダカルシユーム錠

楢林医学博士推奨
片瀬医学博士監査

片瀬医学博士述「安産のために」進呈

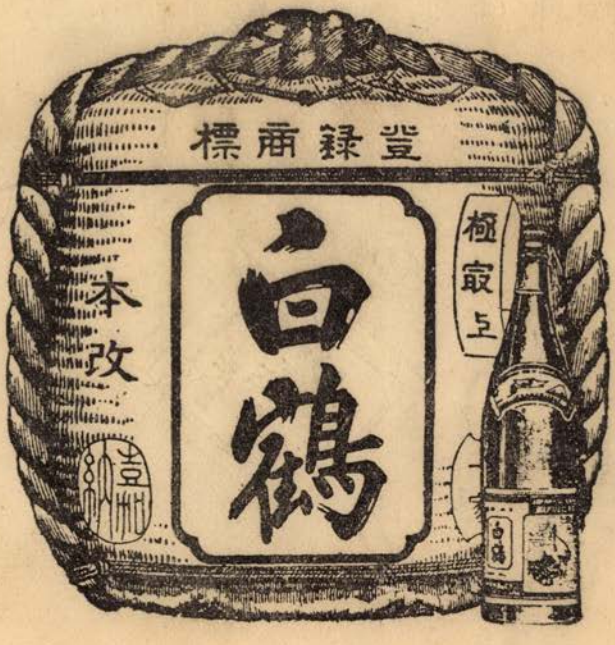
發売元
大阪道修町 和田助商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　川柳雜志　第一四號　定價金參拾錢

清酒

白鶴禮讃

白鶴が縁とはなりぬ君と僕
よろこびに添へて白鶴届けとき
白鶴の方に幹事は極めちまひ
母親も白鶴ならと一つ受け
白鶴をいつもきらきぬくらしむき



攝津灘　嘉納合名會社釀